
磯野の奇妙な冒険

kon(名前募集)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

磯野の奇妙な冒険

【Nコード】

N6804M

【作者名】

kon（名前募集）

【あらすじ】

つむがれる磯野家の血統。
運命を背負う男たちの物語。

その1 いとしのカオリ（前書き）

ジヨジヨ5割、ARMS4割、サザエ1割

その1 いとしのカオリ

磯野カツオ - その青春 -

二人の囚人が鉄格子から外を眺めた。

ひとりは泥を見た。

ひとりは星を見た。

フレデリック・ラングブリッジ

「不滅の詩」

空高く打ち上げられた白球を磯野カツオは目で追っていた。

白球はカツオの頭上を超え、塀の向こうへ消えるとけたたましい音撒き散らした。

周りからため息が聞こえる。カツオも例に漏れず肩を落としていた。

（今日で何回だろうか？）

カツオは頭の中でホームランの数を数えていたが途中から考えるのをやめてしまった。数が大きすぎるからだ。

（いったいあのガラス代はどこから出ているのだろうか？）

そんなどうでもいいことを考えながらカツオ達はすまし顔の白球が転がっている庭に入っていた。

磯野カツオはかもめ小学校五年三組、出席番号2番、将来の夢は元気、最近声変わりをして一部のクラスメートから「誰？」と言われてしまったごく普通の男子。

坊主頭にバットとグローブを持ち歩くいまや絶滅寸前のむかしながらの小学生だ。

今日も日課のように放課後、仲間達と野球をしていた。

平和だ。

基本的に平和なのだ。

十代の少年が求めるようにカツオもまた刺激を求めている。だがカツオは知らない。

彼の思っている平和な日常は徐々に歪み、ついには壊れる。

彼はそんな運命を背負っていた。

ある日カツオのクラスメイトの給食費が紛失した。

登校したときには確かに持っていたそうなので学校でなくしたことになる。

金額こそたいしたことないものの日常のちょっとした事件にどのクラスもその話題で持ちきりになった。

「中島あ。給食費は盗まれたのかな？それとも無くしてしまったのかな？」

僕は盗まれたと思うね！

無くなったのが僕らが体育のときだろ？

その隙に盗まれたんだよ！」

カツオが興奮気味に親友の中島に話しかけていた。

「おいおいカツオ。あまり囁し立てるなよ！」

中島がカツオをたしなめる。

「ちえ。中島は相変わらず優等生だなあ。でもきつとこれは誰かが盗んだんだ！僕はきつと見つけて見せるぞ！」

ややあつて

「案外身近にあるかもな」

そういつて読書を始めてしまった。

（どうしたんだろう中島のやつ。この手の話題は好みじゃあないだろうが、それにしてもそっけなさ過ぎないか？クラスメイトの給食費が盗まれたってのにこの落ち着きよう！それに最後の言葉！よくわからないが気になるぞ）

中島を一言であらわすなら博士だろう。小学生ながら視力0・05

を誇る彼はメガネが必需品だ。メガネをはずしている中島などめつたに見えない。ゆえにかれのアイデンティティはメガネに移りメガネイコオル中島の図式をわずか1ヶ月でつくりあげた。また成績もよくクラスでも上位の学力を持つ彼が博士と呼ばれるのは至極必然だった。

中島はそっけない態度をとることが多いが冷たいやつじゃない。むしろ他人を傷つけないために言葉をつぐむようなやつだ。それは親友のカツオがよく知っている。

だが近頃の中島は違った。どこか他人を見下している素振りがある。表面に出ていないのでみんなは気づかないがカツオは中島の微妙な表情やしぐさでそれを知っていた。

（なにか悩みでもあるのだろうか？）

そんなことを考えながら予鈴のチャイムに促されカツオは自分の席に戻った。

―放課後

カツオは近所の公園に来ていた。一人、空を眺めている。

珍しい光景だった。

いつもなら放課後は仲間を集め野球でもしているところだが今日はメンバーが集まらず帰ることとなった。

そんなときは中島と一緒にぶらぶらしながら帰るのが常だったが今日に限り中島も用事があり先に帰ってしまった。

実に久しぶりの一人での帰宅だった。

なんとなくそのまま家に帰るのはためらわれてこうして公園で呆けていた。

（平和だな…。まるで拷問だ。）

こんなことを考えるのはいままで何一つ不自由なく暮らしてきたからだとも思う。

しかしカツオも年相応に刺激に飢えていた。

なにか事件でも起こらないか…。そして僕が解決する。そうすれば

人生ばら色、町中のヒーローになれてカオリちゃんとも…。

この妄想も三回目である。シチュエーションは違うがカオリの危機を自分が助け、最後には結ばれるという点ですべて一致している。

虚しい。

とても虚しい。

短いため息をつき立ち上がると、帰ることにした。

カバンに手をかけるとふと思い出す。

（給食着…）

今日は給食着を持ち帰り洗う日だ。そして当番はカツオ。それならいつもカバンの横の留め金に引っ掛けてあるはずだが見当たらない。小さい舌打ち。忘れたのだ。

（洗わずに綺麗にたたんで提出する荒技があるけど姉さんがうるさいからな。取りに戻るしかないか。）

しかたなく来た道を引き返し学校に向かった。肩に重りでも乗っているのか、がつくり下がっていた。

子供の声のしない学校って新鮮だな。

黄昏に浮かぶ赤い校舎をみてカツオは思った。（もうそろそろ日も暮れてしまう。はやく取ってこよう。）

下駄箱で靴を履き替え、教室に向かう。人気のない廊下を抜け教室の前まで来ると中から何か音がした。小さい音ではあるが校舎の沈黙の中でははっきりと聞こえる。クラスの誰かがいるんだろう、先生かもしれないな。そう思い扉を開けた。

これからくる夜を知らせるように沈み行く太陽。教室は電気もついていない。影法師のようなシルエット。すぐには誰かわからなかったが、見慣れた顔だということに気づいた。

「中島？」

影法師は中島だった。

「何で中島ここにいるんだ？用事で帰ったんだろう？」

「カツオか…。いやなに、ほんの些細なこと、まったくくだらないんだがね。実は忘れ物をしちまつてね…取りに戻ってきたのさ…。」

「中島、君もか！実は僕も給食着忘れてね。戻ってきたのさ。なんと偶然だろう！」

そういつてカツオは自分のロッカーに手を伸ばす。いつものように取っ手を掴んで手前に引くだけの行動。だができない。ロッカーの取っ手がつかめない。

中島がカツオの手首を掴んでいたからだ。

「中島。この手を離してくれないか？ロッカーが開けられないじゃないか。」

「……………」
中島の目はぼっかり穴が開いているように真っ黒だ。カツオはこんな目をした中島は知らない。いやこんな目をした人間を知らなかった。

「……………」
中島の手が緩んだ。カツオの手首は赤く、確かな痣が残っていた。
「…僕が取ってやるよ。給食着だろ？ほらこれだ。受け取りなよ…」

「……………」
中島はカツオのロッカーを開けすばやく給食着の入った袋を取り出しカツオへ渡した。

「どうした？怪訝そうな顔しているね？僕の行動がおかしいかい？でもこれは友情ってやつなんだぜ。僕は君に友情を感じている。だからこれは必然の行動なんだ。わかるだろ？」

中島はいつもの中島に戻っている。…様な気がする。

（どういことだ！中島の様子は尋常じゃあなかったぞ！）

中島はカツオの動揺に気づきもしないふりで話を続けた。

「カツオ。用はもう済んだろ？俺の忘れ物も拾ったしもう帰らないか？一緒に帰ろう。これも友情つてやつだ。友達なら当然だろ。」

中島は確かにいつもと様子が違う。しかしそれはなにか悩みでもあるのだろう。そのせいで少し気が立っているに違いない。カツオはそう考えることにした。むしろ思い込もうとしていた。

中島も明日になれば普通に戻る。今日のことはたまたまだ。明日からはいつもどおりだ。

帰り道、中島と歩くカツオは繰り返し同じことを考えていた。

カツオが登校し教室の前まで来ると、中が騒がしいことに気づく。

すこし心臓が早くなる。

（なぜだろう。）カツオはわからない振りをした。

教室の扉に手を掛ける。

スライドさせ開けた。

クラスメートが一齐にカツオをみる。

白い目。

宇宙人のような目だ。

みんな一箇所に集まっている？

どこに？

ああ、そこは。

僕のロッカーの前じゃないか。

誰かの声が聞こえる。

たぶんクラスの誰かだろう。

その中の声がカツオには良く聞こえた。

それからは良く覚えていない。クラス中から罵声を浴びせられた

気がするし、必死になって言い訳した気もする。ただ覚えているのは逃げ出したいという感情だけだ。

朝礼の為教室に入ってきた先生はこのあらましを聞きカツオを別室に呼び出した。怒られるのだろうと考えてたのでどう弁護しようかと考えていたが、予想外に先生は頭ごなしに怒ってくることはしなかった。カツオは自分の無罪を主張し、先生は黙って聞いていた。カツオの話を聞き終えて先生は一言「そうか」と言っただけ息をついた。しばらくして

「カツオは犯人じゃない。そもそも犯人なんていないんだ。そこは先生が説明するから心配するな。」

とよくわからないことを言った。

カツオはクエスチョンマーク、先生は開いた本を頭に載せたまま教室に帰ることになった。

先生の弁護はとて、言っしまえばぶっ飛んでいた。

曰く今回のことは事件ではなく事故、給食費はもともと落し物であり、昨日の放課後見つけた誰かが間違っただけでカツオのロッカーに放り込んだというものだった。

誰の目から見てもあきらかなこじつけだ。先生はとくに事故というところを強調していた。しばらくしてカツオはわかった。事故の意味が。つまり、犯人等いてはいけないということだ。事件となれば給食費を盗んだ犯人がいることになる。それもほかのクラスに犯人がいるならまだしも、自分のクラスに犯人がいては最悪だ。一番穏便に済ますには犯人などつくらなければいい。つまり事件ではなく事故として処理したいのだ。

なんのことはない、先生はカツオを信じているわけでもなくただ厄介ごとを消したいだけなのだ。

当然、クラスの誰もがそんな話を信じるわけも無く、カツオは「無罪の犯人」となってしまった。クラス中が宇宙人になりカツオは非難から逃れる為、宇宙服の殻にこもり教室内を漂流することになった。いつかこの哀れな

漂流者を見つけってくれる人間がいると信じて。

公園のベンチでカツオは空を眺めていた。
放課後、逃げるように教室から飛び出したカツオは家に帰るでもなくまたこの公園に来て雲を見ていた。

「はあ……」

何回したかも分からないため息だ。

途中まで数えていたのだが三十を超えてから数えていない。

自分の魂はため息とともに少しずつ殺がれている。そうカツオは感じていた。

実際、今の自分はまるで死人だ。

鏡を見たらそこには真っ白な顔、土色の唇、穴が開いたような瞳。そんなものが写るであろう。

「僕の青春は終わりだ……。これからは惨めな人生が待っているだけなんだ……。」

幾度となく吐いた呪詛の言葉。

そしてこれも幾度となく吐いた言葉。

「中島……」

カツオは半ば以上、いや、ほぼ確信していた。

今回の事件は中島が仕組んでいると。

しかしなぜ中島がこんなことをしたのかがさっぱり分からない。

カツオと中島は入学以来、ずっと親友であった。喧嘩をすることもあるが翌日には一緒に野球をやっていた。大喧嘩をすることもあったが翌日には一緒に雷親父に怒られていた。

自他共に認める親友であるといっていいたいだろう。だからこそ分からなかった。なぜ自分が中島にこんなことをされるのか。

自分が何か気に障ることを言ったのか？

自分が何か気に障るようなことをしたのか？

いくら考えても何も思い浮かばない。

中島自身物事はハッキリと言う方なのだからなおさら分からなかった。

た。

今分かるのは、中島の明らかな敵意だけだ。ナイフのような敵意。深くカツオの心に突き刺さっている。

カツオはとても悲しかった。

おそらくささいな行き違いなのだろう。

話せば分かり合えるはずだ。

そんな希望を持っていても、唯一の親友を失った喪失感は埋まらなかった。

いつまでも続くと思っていた日常は実は、陽炎のようで、気がつかなかった現実が灰色の世界だった。

モノクロの世界でカツオは視線を感じた。

というよりふと周りを見たら彼女と目が合ったという現在が遡り、カツオに視線を感じたという過去を作り上げた。

そしてカツオは確かに見た。彼女の体から、髪から、服から、光の波長が慌ただしくせめぎあい、混ざり、溶け合い、七色では数え切れない眩しいばかりの色彩を放っているということを。そして彼女の放つ色彩はモノクロの世界を侵略し、染め上げていった。

木々はピンクに染まり、草花は真っ赤に燃え上がる。道に敷かれていたタイルは鮮やかなオレンジで、その横に立っている手すりやベンチをぶちまけたようなコバルトブルーだ。自分の座っているベンチを黄色に染めたあと

カツオは自分に色が潤っていくのが分かる。

自分は何色なのかわからないが緑がいいなと思った。なんとなくだ。カツオにとっては永遠の中の出来事だったが、ほんの一瞬、瞬きをして目を開けてみるとそこは変わらずモノクロの世界だった。

ただ、彼女は変わらずキラキラしていて、発色のいい顔をこちらに向けていた。

「カオリちゃん」

カツオを見ていたのはクラスメイトで片思いの大空カオリだった。ふとカツオは思う。彼女もクラスメイトだ、今回の事件を知らない

わけではない。無視されるならまだしもこちらを見たまま立ち止まるというのはどういうことだろう？

カツオが逡巡していると、カオリがこちらに向かって小走りで駆け寄ってきた。

予想外のことにかツオの心臓が一気に爆発する。

頭に血が上り、顔が真っ赤に腫れ上がるのがわかる、完全にパニック状態になってしまった。

何か言われるのかな！？

悪口かな！？

というよりなんでこっちに来るんだ！？

今やすべての言葉に「！？」がついている状態である。

カツオが右往左往しているうちにカオリが目の前にたった。もともと遠くない距離だったのですぐについてしまった。

「あ…あのあののnnnnnnnnnn！？」

何を言っているのかわからないことぐらいは今のカツオにも理解できた。

カオリは俯いていて表情はうかがい知れないが、かすかに見える口元がゆっくり動くのをカツオは見た。

何かしゃべる。

何か悪口を言われる。

カツオはそう思った。さらに鼓動が早くなる。さっきがガソリンの爆発なら今は二トロといったところだろう。

「あの」

もうだめだ。その先の言葉を聞いたら心臓が破裂する。偽者に新しい秘孔を突かれた覚えはないのだが。

「元気出してね」

ああ…僕の心臓が…

カツオは空を仰ぎ、倒れる自分を想像した。

………

……

何かトリップしてたようだ。これが白昼夢というやつだろう。

目が覚め、カオリを見るとそこに彼女はいない。

小走りで出口に向かっている後姿が見えた。

「元気出してか……。なんて可愛らしいんだろう！ 生きる気力が沸いてきたぞ！彼女のおかげだ！」

カツオははしゃぎまわっている。

そしていつのまにか世界は色を取り戻していた。

しかしある一点、モノクロの世界がカツオの近くにいたことをカツオはまだ知らない。

その2 侵略者中島（前書き）

道尾秀介に愛をこめて

その2 侵略者中島

翌日、カツオは通学路を歩いていた。頭の中はカオリの顔で破裂しそうだった。

昨日の晩からこの調子なのでカツオもさすがになんとかしようと思いい、頭の中のカオリを一つずつ消していくのだが一つ消せば二人増えるといった具合である。今朝のカツオの頭の中では小さいカオリの顔が大きなカオリの顔を作っていた。

恋！！

その素敵な好奇心がカツオを行動させたッ！！

足に羽でも生えたように軽い足取りでカツオは学校へ向かう。すれ違う人はみな目を伏せた。

カツオの世界は愛で満ちていた。

道行くひとにこの幸せを分けてあげたかった。

下向いて歩いてくるサラリーマン、宿題を忘れたと嘆く児童（同じ学校だろう）眠そうな目をした主婦。なぜみんな上を向かないんだ！空はこんなにも愛に満ちているというのに。

僕の愛を分けてあげたい！

あの子にも！

その子にも！

この子に…

いつの間にか前を歩いていたピンクのワンピースに頭に大きなリボン。よく見覚えのあるその服装は…

「カオリちゃん！」

カツオは大声を上げ立ち止まった。

カオリも声に反応して肩を跳ね上げて立ち止まった。

周りがまるで見えてなかったのだろう。歩幅で三步程度の距離だ。こんな近くに来るまで気づかなかったとは。

この距離で大声を出してしまった。

確実にカオリちゃんは気づいているだろう。

今にカオリちゃんが振り向くぞッ！

どうしよう！？

カツオは石のように固まった。

………

………？

二人の間に気まずい空気が流れる。

カツオはようやくカオリの様子が変なことに気づく。目を伏せてうるたえているように見える。そしてそれは声をかけられて困っているように見えた。

登校中の児童はいがぐり頭が女の子に詰め寄っている凶悪な光景をみていた。

「……？」

カツオが声をかけようと手を伸ばしたそのとき、カオリは突然、背を向けて走り出した。

「カオリ！どうしたんだ！？何か変だぞ！あつたとたんのこの態度は！？」

カツオは手を伸ばす。

「待って！カオリ！？いつたい？」

カツオの声は届かない。

小さくなるカオリの背中。背中が町に溶けていく。溶けて、溶けて、やがて街の一部になる姿をカツオは見ていた。

いつまで立っていただろう。

どのくらい呆けていただろう。

時間が止まったような、それでいて一瞬で時がすぎ去っているような不思議な時間の中でカツオはただ立っていた。

ふいに現実に戻った。だれかに石を投げられたようだ。

「ウケケケ……」

後ろを振り向くと何人かクラスメイトがいた。最近、中島とつるんでいる連中だ。

「見るよカツオのなさけねエ姿を！ウヒヒヒヒヒ！」

「おい言ってやれよ、なぜ彼女があんな態度をとるのかをよ！」

「やだよ。おれカツオが悲しむ姿をみたくなーモンッ！ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

下卑た笑いがカツオの耳に突き刺さる。

「お…おまえら…」

空だった体に血がめぐりだした。体中を駆け巡り、やがて抑えられないほどに暴れだす。

鼓動が激しくなる。息が荒くなる。

いつの間にか握り締められたカツオのこぶしからは血が流れていた。

カツオは

叫んだ

「カオリに何をしたーッ！！」

かもめ小学校五年三組。

クラスでは登校した生徒が朝礼前の談笑している。中島も登校しており自分の席で本を読んでいる。

――。

はじめは遠くで車が走っているような音だった。

トトトトトトトト…。

なにかが爆発した。五年三組にいた全員がそう思った。扉の開く音を爆発音と聞き違えたのだ。

引き戸の扉は観音開きに開いる。扉を突き破った足がゆっくりと地面に下るされる。足の主は肺を空気で満たし
そして叫んだ

「ナアアカジマアアアアー！！！」

すぐにカツオだと気づいた者はいただろうか？

顔も声もカツオのそれとはずいぶん違っていた。

中島は読んでいた本を閉じ、スウーと立ち上がる。

「人の名を！ずいぶん気安くよんでくれるじゃあないかそれに思いつきりにぎりしめている拳！いつたいていそれでどうする気だ？」

「決して許さないッ！君の僕に対する嫌がらせではない！僕の事などどうでもいいッ！」

「ほう！さては聞いたな、あの愛しのカオリの事を！そして鉄拳による報復に出ることを考えたわけかッ！」

クルリと振り返った中島の顔はいびつに歪んでいる。カツオはその顔めがけ走り出した。その姿を見た中島もまたカツオめがけて走り出す。

「カツオ！見苦しいぞ嫉妬に狂った姿はッ！？」

「彼女に対する侮辱が許せないッ！」

なおも挑発を続ける中島に、カツオは一切のためらいなく握り締めたその拳を突き出す！空を切る、というより空気の層をそのままぶち破るような音を放ちながらカツオの拳は中島の顔に吸い込まれていく。

メギヤア！

凄惨な音を発し顔面が潰された。

握り締めたはずの拳から力が抜ける。フルスイングで放ったカツオ

の拳は中島の前髪をかすり、ミリ単位でよけた中島はカウンターで肘を顔面に叩き込んでいたのだ。

中島は口はしを上げ、グリグリとさらに肘をねじ込ませる。

指先から、爪先から力が抜けていく。脳が揺らされた、とわかったとたんカツオは

——あ

と小さくうめき床にしりもちをつく。

中島は乱れた襟元を直しながらカツオを見下ろす。

「マヌケがア……………」

息がしにくい。鼻血がひどくて呼吸が困難になっているようだ。

「か…かなわない……………」

カツオは呟いた。

（で…でも負けられない…。もしこのケンカで負けたらこれから一生、中島の影でオドオドと生活しなくてはならない！な…なによりも力オリの名誉を取り戻すため戦わなくてはならない！）

カツオは震える足で立ち上がる。何度も倒れそうになる体を支えたのは正義の力だとカツオは思った。この体に流れる血は決して悪を許さない。それが磯野の血なのだ。全身を血が駆けめぐる。力がわいてくる。中島を倒せと。血が叫んでいる。

う…

「うおおあああつ！！」

中島めがけカツオは走る。

「こいッ！」

中島は応戦の構えを取った。

カツオは右の拳を振り上げ、思いつきり振り下ろす！空気を割る音が先ほどと比べ物に鳴らない。テクニクもセンスもない、最も原始的なその拳は凶器と化して中島を襲う！

中島は、なんと腕を十字にして受け止める姿勢をとった！

カツオお構いなしに拳を振りぬける！中島の交差した腕に拳が叩き込まれ中島の両腕は粉碎した……はずだったが、なんと中島は悠然とカツオの攻撃を受け止めていた。

それと同時に飛び上がり中島は膝を繰り出す！

カツオは攻撃を受け止められた際一瞬、体勢が崩れていた。その隙を中島の膝は狙っていたのだ。

中島の膝は日本刀のような鋭さでカツオの顎を切り落とす。カクンとカツオは人形のように首をかしげる。威力、角度、速度ともに申し分ない攻撃だ。確実にカツオの脳を揺らし立てなくしたはずだ。

最悪の場合首が折れて死ぬ可能性もあったが、中島はまったく躊躇なく振りぬいた！

「いいぞオ！新たな力がわいてくる。いい感触だッ！」

中島は勝利を確信し毒を吐く。カツオの体が床に沈んでいく。中島に体を預けるように前のめりに倒れ、中島の足元に無様な姿をさらすかと思われたがカツオは、いつの間にか、中島の頭を掴んでいた。「うっ！こいつ蹴りを入れられて掴んでくるとはッ！もう一撃ほしかッ！」

言い終わるやいなやカツオはその口に頭を叩き込んだ。ハンマーで殴られたような衝撃を受け、――グルン――と中島は目をむいた。

「うげええええッ」

中島が悲鳴を上げ倒れる。しかしカツオは倒れることを許さない！中島を拳で立ち上げらせる！

「ナカジマアアアッ！」

「君がッ！」

一発！

「泣くまで！」

二発！

「殴るのをやめないッ！」

三発！

アナザーサイド 中島

中島弘の両親は死んだ。

父親は終戦間際に戦死、母は戦後、栄養失調で死んだ。それから孤児になった中島は祖父母の家に預けられた。

祖父は息子を失った悲しみから荒み、酒に溺れ、次第に祖母や中島に暴力を振るうようになった。中島が覚えている祖父の顔はいつも悲しそうだった。家や家財を売りなんとか生活してきたものの、次第に金もそこをつき始め、仕方なく祖母は働きに出かけるようになった。しかし、その金も酒に変わり祖父の胃の中に納まるのだった。もともと体の弱い祖母は体調を崩しがちになり、やがて寝込む日が多くなっていった。

そしてある日、中島が帰ると祖母は死んでいた。着替えていたため働きに出ようとしたところ倒れてしまったらしい。祖父は隣の部屋でいびきをかいていた。

祖母のいなくなった中島の家はますます貧しくなった。一日何も食べれない日もさらにあった。

入学もしていない幼い中島は生きるために何でもした。主に賭け事で口に糊をしていたが必要とあれば盗み、詐欺も働いた。中島が生きるためには仕方なかった。

「おじいちゃん気分が悪いのかい？ だったら…この薬を飲みなよ…」なぜそんなことをしたのか今ではわからない。ある日、いつもより大目に稼いだせいもあり、中島は祖父に薬を渡そうと思った。

だが祖父はムクリと起き上がり中島を殴りつけた。

「バッキヤローッ！ ヒロシてめっツ薬を買う金なんかどーーやつてつくつたア~~~~ッ！！」

「将棋をして勝ったんだよ……おじいちゃ……」

「だったらその金で酒を買ってこいってんだよオー！ツ！マヌケがア~~~~ッ！！」

祖父は手につくもの、片っ端から投げつける。こうなると手に負えない。中島は身をすくめて嵐が過ぎるのを待った。

「酒こそ薬さ！こいつをたたき売って酒買ってこいイーッ！今すぐだアー！！」

「うつ……！こ……これはおばあちゃんの着物だッ！！」

中島に投げつけられたものは生前、祖母が大事にしていた嫁入りの着物だった。この着物の話をする祖母の目はいつも輝いていた。淡い思い出の中でその瞳を中島はよく覚えていた。

「死んじまった女のものなんか用はねえゼッ！」

――。

耳の奥でガラスが割れるような音がした。

とてつもない虚無感に襲われた。体中がからっぽになったようだった。しかし、からっぽになった体には、黒い何かが満たされていた。た。

「地……………」

「地獄へ落としてやるッ！」

中島は知らずに泣いていた。何のための涙だったのだろう。怒り？悲しみ？恐怖？あるいは善意や良心を流していたのか。

そして、涙をぬぐったその下は――。

数日後、中島はある場所へ赴いた。

食屍鬼街、またはオウガーストリートと呼ばれる戦争の負の遺産。ブラックマーケットだった。

戦後の混乱の中生まれた闇市は多くは四十九年、GHQが撤廃命令を出したことにより次第に姿を消していった。

しかしこのオウガーストリートは違った。他所の潰れた闇市から流

れてきた、主に在日外国人が団結、またそれまで取り仕切っていた地元暴力団が強力に結びつき、ある種の秩序を形成していった。また配給制度の形骸化した当時の状況で、法外な値段とはいえ食料が手に入る闇市は国民に支持されオウガーストリートは戦後最大規模の闇市となった。

中島がここに来たのはやつを殺す毒薬を手に入れるためだった。あくまで疑いが自分に向いてはならない。そのためには外国から輸入されるような日本では手に入らない毒が必要だった。薄暗い路地をさまよい中島はソレを探した。

いつのまにそこにいたのだろう。フードを目深にかぶったぼろぎれが目の前に立っていた。まるで気づかなかった。まるで幽霊のように突然現れたような錯覚に陥る。いや、錯覚なのか？奇妙な感覚が全身を支配した。中島は麻薬などやらないがトリップとはこんな感じなのだろうかと考えていた。

「突然だが君は『引力』を信じるか？人と人の出会いは引力で引き合わされると！？」

男の声だった。その声は中性的で、ひどく脳に響く声だった。

「……………何を言っているかよくわからないが…？」

「出会いとは『引力』ではないのか？引力とは精神の引かれあう力だ…そして出会いとは精神の発展。君が私にどういった印象を持ったのか知らないが、この必然の機会に君に贈り物をプレゼントしたい」

「…なに！？」

ふっと横から手を出された。まただ！いつの間にか目の前から消えてぼろぎれは隣に立っていた。

「これは…矢…？」

男の手には石でできた矢がのっていた。

「君に必要なものは『乗り越えること』だ。すべてを乗り越え、死

すらも超越したとき君は真の王となる。この矢はそれを助けてくれるだろう。まあ君が必要ないといえばそれはそれでかまわないのだがね……。」

「な……何を言っているんだ……？イカレてるのか……？」
声は震えていた。

この世のものではない真の恐怖を、今、味わっている。この男の前では自分の命など吹いて消える淡雪のようだ。

中島は今、生まれて始めて死を覚悟した！

震える拳を握りしめ、カスタネットのような歯を食いしばり、中島はゆっくり、ゆっくりと、声のほうを向いた。

一瞬、世界が光ったような感覚、ふと中島は元の世界に戻ってきた。さっきまでの異様な空気はどこにもない、中島がよく知る世界だった。

男はもういない。

白昼夢かと思う中島の手の中で『矢』の感触がそれを否定していた。
(なんだったんだ今のは……そしてこの『矢』はいつたい……？)

装飾が施されている以外何の変哲もない矢だ、すくなくとも高価なものには見えない。というより矢竹が三分の二以上なくなっており、^{やじり}鏝とそこから出ているすこしの矢竹だけなのだ。たとえ高価なものだとしても今はその価値を失っているであろう状態だった。だが不思議と持っていると暖かい気がする。

(……………)

馬鹿なと思う。しかしその思いつきは不思議な魅力だった。

(この矢は………この矢は生きている！)

なぜそう思ったのかはわからないが、そうとしか考えられなくなっていた。中島の手の中で物言わぬ『矢』はなにを思っているのか？
中島はじつと『矢』を見つめた。

「ぼうやの耳………面白いホクロあるね」

背後から訛りのある声がした。一瞬さっきの男かと思ったが声がまったく違う。なによりさっきの異様な空気、いうなれば『別の世界

に連れて行かれた』ような空気ではなかった。中島は『矢』を懷に隠し振り向く。そこには中華系の老人が立っていた。

「私の祖国、占い盛んね。わたしの国でそれと同じほくろを持つ人前にも見たことあるね」

「……………」

「彼は波乱の人生を送ったが183歳まで生きたね…ヒヒヒ！ただの占い遊びね！気にしない気にしない。ところで毒を探しているぼうやはあんたね？」

そうだ本来の目的を思い出した。

「金次第で何でも作るね。とにかくついてくるね、ぼうや…」

中島は老人にとともに路地の闇に溶け込んでいく。懷では『矢』が静かに鼓動を繰り返していた。

『矢』は静かにそのときを待つ…

その3 炎のタマ（前書き）

その2の最後を持ってきて後半に少しエピソードを付け足したものです。

その3 炎のタマ

「こ…こんな」

中島は殴られながら考えていた。

「こ…こんな！」

膝が入っていた時点でヤツの意識は飛んでいるはずだ。なぜ、今僕が殴られている？

「こんなカスみたいなヤツにこの中島がッ！」

カツオの渾身の一撃を受けて中島は教室の壁まで吹っ飛び、床に転がった。血が教室中に飛び散る。

なぜ僕が床に転がっている？

少しして自分がカツオに殴り飛ばされたことに気づく。

じわじわと

中島の精神を殺意が蝕んでいった。

カツオは肩で息しながら体勢を整える。無我夢中で反撃したとはいえ、カツオは瀕死の状態だったのだ、少しでも体力を回復させたかった。

息を整え少し落ち着くと周りの状況が見えてきた。死闘の中ではわからなかったが教室中血だらけだ。そしていつの間避難したのか誰もいない。教室にはカツオと中島しかいなかった。

あらためてみると異様な光景だと思った。中島とこんな凄惨な殴り合いをすることになるとは考えたこともない。やはり中島はおかしい。何か訳があるはずだとカツオは信じたかった。こんなわけもわからないまま中島との友情が終わるなんて考えたくもなかった。友情と疑心には生まれカツオは思考を逡巡した。

「よ…よくも…」

中島が呻いた。カツオはとっさに構える。

「よくも」

中島は床を引きちぎらんばかりに爪を、立ち上がろうとする。ダメージが残っているのか膝をついたまま止まる。

「よくも！この僕に向かつて……」

そういつて中島の顔がこちらを向く。肩を震わせながら。その震えを隠そうと肩を抱きながら。

中島の顔を見たときカツオは戦慄する。

「な、涙………」

中島の目からは涙があふれていた。それはいったい何の涙なのか。カツオにはわからなかった、がその目の奥にある黒い光、それは追い詰められた獣のソレだ。中島は今や手負いの獣と化していることを示していた。中島はなにか仕掛けてくる！カツオは身構えた。

「このきたならしい阿呆がーッ！！」

中島は吼える。そしてさりげなく手を後ろに回しそのドス黒い狂気の塊を掴む。カツオからはまったくの死角だ。キラリと刃が光る。中島は明確な殺意を持ち！ナイフを手を取ったのだ！

じりじりと距離をつめ間合いを計る。焼け付くような汗が流れる。

互いの間合いが触れ、二人の手が交差するその瞬間！

教室の扉が開いた！

「二人ともいったい何事だッ！」

騒ぎを聞きつけた先生が駆けつけたのだ。

「先生ッ！」

カツオと先生の目が一瞬、中島からそれる。

中島はその隙にナイフを隠した。

「男子たるものケンカのひとつもするだろう！」

しかしカツオ！今のは抵抗もできなくなった中島を一方的に殴っているように見えた！紳士のすることではないッ！」

「え？ち……ちがう！」

「いいわけ無用！廊下に立つとれッ！ふたりともだ！あとでふたりとも罰を与える！」

カツオと中島は視線を交差させる。中島の目ははつきりと敵意が浮かんでいた。晴れぬ気持ちを抱えたまま、そして中島への謎を抱えたまま、カツオが先に廊下へ出る。中島はその背中をいつまでも見つめていた。

地平に沈む太陽は、しかしカツオの気持ちとは真逆に空を煌々と赤く染め上げていた。

「夕焼けがきれいだなあ」

暗澹とした声でカツオはつぶやく。

あのあと先生にたつぷり絞られ帰路に着いたところだった。中島はというと具合が悪いとの事で早退（もちろんその前に説教を受けたらしい）してしまった。

カツオの気持ちは今や二万マイルの海の底である。中島の不可解な行動、喧嘩、説教、なによりカオリのこと、重石となってカツオの心を沈めていた。

（早く帰って寝よう…）

重石のことを考えるほどの気力は残っていない。今はただ海の底で静かに眠りたいと願うばかりだった。

家の前まで来るとなにか騒がしい声がすることに気づいた。姉がまた何か騒いでいるのかと思いきや、気にも留めず玄関を開ける。

「カツオー!!」

「カツオくん!」

いきなり父の波平と義兄のマスオに名前を叫ばれた。その瞬間カツオは気づいた。

—まだ終わってない。

庭にはおそらくそうであろう土のふくらみの上に石が積んであった。それは飼った猫タマの墓だった。誰かに焼却炉へと閉じ込められたタマは無残にも焼き殺されてしまった。誰が何を言わずともカツオはすべてわかっていた。

「あまりにひどいなきがらだったのでお前には見せず埋葬したよ…。あとでちゃんとした墓標をたててやろう…」

波平は悲しそうな顔をしながら厳しくも、ハッキリとした声で言った。

「たぶん私の家に入って物を取ろうと考えた盗人が邪魔でやったことだと警察は言っている…。なぜこんなむごい殺し方をしたのか理解できんが警戒を強めねばならん！」

「大丈夫かい？カツオくん？」

ポツリ

「……………中島…」

「中島くん？今日は来てないよ？」

冷たく、さびしい風が吹き抜ける。主を失った食器はただひたすらにタマの姿を訴えていた。

カツオは一瞥けると部屋へ行き2時間眠った…。そして、目を覚ましてからしばらくして…タマのことを思い出し、泣いた…。

その頃、中島は一人公園の柵に腰掛けていた。

（ヤツがあんなに爆発力があるとは…。徹底的に叩きのめし『自分は今この中島には勝てない』という事をカツオ自身の体で覚えさせる計画は失敗だッ！カツオをみくびっていた、あなどれん！ヤツは叩けば叩くほど成長するタイプだ！猫を始末し屈辱を晴らしたが自分の欠点は怒りっぽいところだ、反省しなくては！よりもっと自分の心を冷静にコントロールするように成長しなくては…。）

…そして物語はここから十一年の歳月が経過する。ひとりぼっちのカツオはどのように成長していくのだろうか？『矢』と中島が引力で惹かれあつたように、この二人も引力で結ばれている。決して交わらない二重の螺旋を描きながら物語は時を待つ。

その4 過去からの手紙

ずうつと遠くから地響きが聞こえてくる。それに伴いアナウンサーの声にも力が入っていくようだ。

「とったアーッ！！ボールを奪い取ったのは我がロバート・ゼメキス日本校の雄！！磯野カツオだぁーッッ！！」

オムライスを想像させるボールを手に取り、ライオンのようなう唸り声をあげ、カツオは走り出した。

「普段は静かなる男！身長195センチメートル磯野カツオ雄たけびを上げてゴールにとっしんするウ！大学卒業を目前にしたこの試合！優勝で飾れるかアーッッ！！」

「おおーッつと、つかまったアーッ。敵校の一人が磯野にタツクル！！しかし！たおれない！引きずるぞオ磯野！そして二人つかまったッ…また三人目！」

グワワツ。音を立ててカツオの筋肉が盛り上がる。丸太のような腕がさらに膨れ上がった。

「……す…すつごおーッいッ！！三人にタツクルされたまま引きずりながらも突進をやめないッ！磯野カツオーッ！なんという爆発力！なんという根性！まるで重機関車ですッ！」

「四人目ッ！！さすがにぐらついたッ！両ひざをつくか磯野！！ああッ」

ひざをつく直前、ボールを投げる。ボールの落下地点にはすでに一人の影が走り出していた。計算されつくしたようなコンビネーション。パスが通る。飛び出した影は……

「中島ッ！やはり我が校の中島ヒロシですッ！」

ボールをつかみさらに加速をあげていく、しかし後方からディフェンス二人に飛び掛かれた。中島に人間二人を引きずるような力はない、捕らえられダウンかと思いきや、中島はスッ…とクイックターンでなんなくかわしてしまった。そのさきには誰もいない、中島

の背中を追うものばかりである。

「華麗な走りですッ！ぬけるかッ！！ぬけるッ！！ぬけたアーッ
ッ単独走ですッ！華麗だ！あいかわらず華麗な走りっぷり！」

「そしてエー——トライ——！」

「やったアー——ッ最後の試合を優勝で飾りましたアー——ッ！」

「カツオに3／＼4人の敵選手をタックルさせ手薄になったノーマー
クの中島にパスして点を稼ぐ！絶妙の作戦だッ！ぴったり合った呼
吸！」

「やったなカツオ！またまたばくらのコンビで勝負を決めたなッ！」

「うん！中島！見事だったよ君の走りは——！」

「ありがとう！だがカツオ、君あつてのトライさ！」

互いの功績を称えあうなかでアナウンスが響く。

「中島ヒロシは法律でナンバーワンの成績で卒業する予定！かたや
磯野カツオは単位が足りずに留年する予定です！このラグビー試合
も二人あつての優勝！まさに我が校の誇りです！」

「……さて、この勝利をさっそくお父さんに報告しなくっちゃあな、
カツオ着替えたら待っててくれ、一緒に帰ろう」

そういつて中島は背中を向けシャワーを浴びに行つた。途中で新聞
部につかまりインタビューされている。

……。

「お父さん……お父さんか……。中島が僕の父さんをそう呼ぶようにな
つてからどれくらいたつだろう……？」

カツオたちが六年生に上がる前、中島の祖父が死んだ。すでに両親
が他界している中島にとって本当の意味で天涯孤独となった。そし
て中島は一通の手紙を持って磯野家に来た。それは祖父の遺言であ
り波平に当てられたものだった。

波平と中島の祖父は戦時中、第九陸軍技術研究所で働いていた。
波平は研究中、事故にあい、命を落とすところを中島の祖父に助け
てもらった、いわゆる命の恩人だ。

手紙には中島の今後の面倒のことが書かれていた。死期が近いこ

とを悟り筆をとったのだろう。

波平も恩人の頼みなら、と二つ返事で了承し、中島は磯野家の一員となった。

「十年か…。あれから十年もたつ…。今、中島とあんな会話をしていたけど正直ぼくは彼に対して友情を感じていない…。なぜだ！？彼はあんなにすぐくていいやつなのに友情を感じないんだッ！十一年前の事件のせいか！？タマの事だって力オリの事だってぼくの思い込みだッ！証拠がないッ！ああぼくはなんて嫌なやつだ！まだあの時のことを疑惑し恐怖している！」

カツオは拳を握り天を仰ぐ。自分の中の感情が許せないのだ。この十一年間、カツオと中島はもとの親友に戻っていた。少なくとも周りの人間はそう見ていた。だがカツオはいつも感じていた。中島と話するときも、食事をするときも、『人形』を相手にしているような気分になることを。カツオはこれを自分の問題だとして心の底に沈めていた。過去の事件がこの疑心暗鬼を生み出しているのだと。

「中島！学校の新聞に君たちの友情について書くけど話してくれないか？」

「友情だつて！？…テレるな…」

中島は談笑している。周りのと同じように笑い、軽いジョークを交え、実に洗練された話し方で人を引き寄せる。だがその目には誰もうつっていない、その言葉は誰にも発していない。中島の邪悪な心は幾重にも偽善の皮で覆われ誰にも気づかれない。

すべては力のために

祖母の墓の前で誓った

だれにも負けない男になるため

利用できるものはすべてを利用してやると

「友情だ！？きれいごとを並べてニコニコするなよクズどもがッ！もうすぐ卒業…。もう波平の援助はいらん！十一年カツオを表向き仲良くしたのはこの期を待ったからだ！計画は磯野家の財産をのつとること！磯野家は俺のものだ！」

磯野家。

波平はいつものように畳の上に臥せってせきをしている。見慣れた光景、もはや景色と言ってもいいぐらい、波平が臥せってから時間は流れていた。一年前、波平はカゼをひいて以来体調が戻らなくなつた。カゼをこじらせただけかと思つていたが、医者に見せたところ言われたことは原因不明、そのまま症状は緩やかに悪化し、なにも解決しないまま一年の時間が流れてしまった。澁刺としていた顔からは覇気がなくなり、頬はやせこけ、カツオを怒鳴りつけていた声は蚊の泣く音にかき消され聞こえなくなつていた。

カツオと中島は並んで、布団の横に座っている。

「お父さん。ご気分はいかがですか？」

「うむ…だいぶいいよ……ゴホッ…ただせきが止まらないな…今日医者に入院を勧められたよ」

「入院？それはしない方がいいです」

中島がはつきりと進言した。空気が揺らいだようにカツオは思った。「病院は施設が悪いくせにもうける事ばかり考えて入院を勧めてくれるんです」

「うむ…私も断つたよ。自分の家のほうが安心していられる。胸の痛みもなくなつたし手の晴れもひいたみたいだ…良くなっている…」カツオは齒がゆい思いを励ましの言葉に代えることしかできなかった。

「父さん…早く元気になつてください。本当に！」

（カゼをこじらせたただけなのにこんなに悪くなつて…ちつとも良くなつているとは思えない…ああ！留年してるひまがあつたら医学の勉強でもしておくんだつた！でもこれは治る病気さ！）

「ところで」と波平が明るい声で言う。

「カツオ！ヒロシ！優勝おめでとう！」

優勝。それはラグビーの試合に他ならないだろう。

「ええッ！もう知っているんですか？」

カツオも中島も驚いた。今、その報告をしようとしていたところなのだ。

「大学の友人がさっき来てくれて教えてくれたよ！」

「ひどい友人を持ったものです！僕らは真っ先に喜ぶ顔が見たくてすっ飛んで帰ってきたのにッ！」

ドッ！と部屋に笑い声が響く。中島の軽口のおかげで部屋のなかに光が差し込むようだった。

「いやいや喜んどる！わたしは鼻が高いよ。すばらしい息子たちだ！」

「ヒロシ…君は特にがんばった…卒業したらなりたいものになるがいい！援助は惜しまない。君は私の家族なんだからね」

……。

「貧しい出身のこの僕にチャンスを与えてくれてありがとうございます……ます……ますます励みたいと思います……」

中島の目が一瞬

光を失い

別の人間になったようにみえたのは

カツオの見間違いだろうか？

「そろそろ薬の時間だ。父さん、いまお持ちいたします……カツオもそろそろ部屋に戻ろう、父さんの体に障るといけないからね……」

「あ……ああ……そうだな中島。それじゃあ父さんこれで失礼します。」

二人は部屋を出て、台所の前で別れた。

数日後

「あいかわらずホコリっぱいなあ」

母のフネに言われカツオは物置の整理をしていた。

「ふう、しかし父さんは本好きだな。種の起源に優生学か……。ムズカシくて僕にはわからないなッ！中島なら難なく読みそうだけど」
独り言をつぶやきながらカツオは作業を進める。物置の中はだいぶ片付いてきた。そのとき、棚においてあった箱に袖が引つかかり落としてしまった。

「あ！」

がらがらと豪快な音を立てて箱は中身をぶちまけた。

「しまったアー。しかし高価なものでなくて良かったぞ。」

さっそく床に散らばったものを箱に戻していく。書物、小物、書類。そのなかでひとときわ目を引くものがあつた。

「……古い手紙だ」

それはまるで見つからないよう、本と本の間に隠れていた古い手紙だった。

「これは……中島……中島だつて！？中島のおじいさんの名だッ！中島のおじいさんが僕の父さんにあてた手紙！十年前だ！へー……つ、こんなところにまぎれていたのか」

擦り切れた手紙はそれだけで時の流れを感じさせた。

「そっぴや中島のおじいさんは死を覚悟してこの手紙をくれたんだつたな（死の直前というのとはどんな文章を書くのだらう。読みたい

……十年前のだ読んでもかまわんだらう……）」

カツオは中身を取り出し目を通す。

そこには――。

「ヒロシ君いつもすまないねえ」

フネが薬と水をのせたお盆を中島に手渡す。

「薬を上げることくらいたやすいですよ」

「年はとりたくないわね。お盆を持つ手が震えてひっくり返してしまいそうよ」

「なあーに、かまわないですよ。お母さんはゆっくりしててください」

波平が臥せて以来、中島が薬を持っていくことが日常的になっていた。

今もまたいつものように薬を受け取り、波平へ届けるところだった。そう、いつものように。

台所を出て、波平の部屋へ行く途中だった。カツオが突然飛び出してきて中島と出くわす。カツオが見たものはお盆の上の薬、水、そしてなにかを隠すような中島の手の動き！

「中島…今その薬…どうした…？」

「……………」

二人の間で視線が交わる。汗が一筋、光る。

「十年前、君のおじいさんが出した手紙…偶然見つけたよ…読もう！

…私は今…病にありますたぶん死ぬでしょう、わかるのです、病名はわかりませんが『心臓が痛み』『指がはれ』『せき』がとまりません…私が死んだらどうかヒロシのことを……………」

――。

「ぼくの父さんと同じ症状だーッ！いたいこれはどういう事だッ！中島ーッーッー！」

中島の目が、カツオを射抜いた

その5 人間を超越する！

（中島のおじいさんからの十年前からの手紙！：僕は今！とても恐ろしい想像をしている！中島は、自分の本当のおじいさんを殺害しているッ！思えば彼は死んだおじいさんについて話すことをいつもさけていた！！そして今彼は僕の父を殺そうとして磯野家の財産を狙っているッ！）

（病死のように殺害する薬を使つて！）

中島が薬の乗った盆を静かに置いた。

「いつたい……何の話をしてるんだ？…へえ……十年前の僕の祖父からの手紙だつて？ちよいと見せてくれよ…」

中島が恭しく手を伸ばす。カツオはその手から手紙を遠ざけた。しばし交わる視線。

「君はいつも父さんに薬を運んでいたのかい？」

「おいおい、いつたい何を言い出すんだ！？」

「答えるッ！」

カツオの気迫に押されたのか中島が少しひるむ。

「ああ…そうだよ！それに僕の実の父と症状が同じだったかもしれない……君はいつたい何が言いたい？」

「その薬調べさせてもらう！」

カツオのよく通った声で発せられたその宣言は、同時に中島に対する威嚇でもある。

カツオはゆっくり盆の上に手を伸ばす。実にゆっくり、ナメクジのように手を伸ばす。

指先の神経が空気を割るのを感じ取れた。ぴりぴりする感じだ。あと数センチ。

薬に手が届いた――。

そのとき、バシィ！と強力な圧力が手首に襲い掛かる。

中島がカツオの手首を掴んでいた。

中島の目を見る。ギラッ——とした光にカツオの目が焼き尽くされるかのような威圧感。

カツオは思わず、そしてほとんど本能的に、目を背けてしまった。

「カツオ！その薬を調べるという事は我々の友情を疑う事！友情を失うぞッ！」

（うつっ！中島の目に威圧されて目を伏せてしまった………これもあくまで疑惑に過ぎず僕の心にも確信がまるでないからだ！……しかし、中島の気持ちを試す方法が一つだけあるッ！）

「カツオオ……その薬を盆の上にもどせよ……そしたら君のバカげた考えの事は忘れよう」

中島が甘い声でささやいてくる。一種のカリスマだろうが、気を抜くとすべてを許してしまいそうな声。だがカツオは中島の手を振りほどく。そして高らかに宣言した。

「中島！紳士として、君の実際の祖父の名誉にかけて誓ってくれッ！自分の潔白をッ！自分の祖父に誓えるなら僕はこの薬を盆の上にもどし二度とこの話はしない！」

中島の時間が止まる。

（もしも僕の恐ろしい推理どおり自分の祖父を毒殺しているなら……

……なんらかの反応を見せるはず！いや！彼の誇りに対する性格から『誓い』はできないはずだ！）

「中島！さあ！誓ってくれッ！」

「ち……誓いか……ぐぐぐ……」

中島があきらかに動揺している。カツオの予想どおり中島は極端なプライドを持っているのだ。

しかし、追い詰められた獣は牙をむく。それが虎ならなおさら――。

「い……いや！おれの前であいつの話はするな……。あいつの名誉に誓

うだと……？かんちがいするなッ！」

中島の目が 見開く。

「あんなクズに名誉などあるものかアーーーーッ！！」

中島の拳が牙をむいた。

「カツオ！薬をもどせッ！そして手紙を渡すんだアーーーーッ！」

カツオは、その拳をよけず、顔で受け止めた。

「ブン。君への疑惑が確信に変わったぞッ！中島！君の動揺と憎悪は普通じゃない！君と実の祖父の間に何があつたのかは知らんが君は実の祖父を殺しているッ！」

顔から鮮血が飛び散る。だがカツオの目は迷いのない『黄金の光』を帯びていた。

「親指を突っ込んでやるッ」

中島は親指を突き立てる。このままカツオの目に入れば間違いなく失明するだろう。しかし、カツオは迫り来る恐怖に瞬き一つせず、中島の手を掴んだ。さながら合気道のごとく手首を決める。

「うげえ！」

おもわず中島が呻く。手から肘から、骨たちが悲鳴を上げていた。

中島の耳に届くほどに。

「う……う……。こ……こいつなんて力だ」

「僕は父を守るッ！磯野家を守るッ！」

カツオは中島の襟首を掴み、軽々と持ち上げてしまった。そのまま壁におもいつきり投げつける。豪快な音をたてて、中島は壁に埋まった。

「君のこの十一年間の考えがわかった！僕らには最初から友情などなかった！そしてもう父には近づけんッ！こんなこともあるつかと警察を呼んでおいたッ！もうまもなく駆けつけるだろうッ！必ず刑務所に送り込んでやるぞッ！」

何事かと妹のワカメと弟のタラオが廊下から顔を出す。

「こつちに来るんじゃない！部屋に戻ってるんだッ！」

カツオの剣幕にヒツと短い悲鳴を上げて二人は逃げるように部屋へ

入っていった。

中島は悲鳴を上げる体をなんとか起こそうとしていた。

（もうちょっとで財産が手に入るところだったのに手紙など見つかったのは何かの前兆か！？だがもうこうなつた以上ひく事はできないッ！カツオを…）

「殺るしかない…」

ポツリとつぶやく。

（警官が来るまで後三分と見た！三分以内にカツオを殺す！サザエとフネは買い物中、マスオは仕事、ワカメとタラオはカツオが引つ込めてくれた！この状況はお前が作り出したんだ！カツオ！お前が自分の父を毒殺しようとした事にしてぶち殺してやる！）

（中島！今度は何を考えている！？だが君がどう出ようと僕は戦うぞ！僕は磯野家の磯野カツオだッ！！）

……

「カツオ…僕の負けだ…おとなしく警察に捕まろう…ただひとつ、勝手だけど頼みがある…最後の頼みなんだ…僕に時間をくれないか？警察に自首する時間を！」

中島は突然ざんげし始めた。シェイクスピアの登場人物のようにかぶりを振っている。

「え？（意外！自主しただって！？中島がこんな態度をとるなんて！僕はつきり追い詰められた野獣のごとく必死の反撃に出ると警戒していたが……）」

中島は隠し持っていたナイフを手に握る。

（まさかカツオにここまで追い詰められるとは…迷っているときではない！油断させて一気にナイフでぶつ殺してやるッ！）

「カツオ！ぼくは悔いているんだ今までの人生を！貧しい環境に生まれ育つたんでくだらん野心を持ってしまったんだ！バカなことをしでかしたよ、育ててもらった恩人に毒をもつて財産を奪おうなんて！」

中島の必死の説得にカツオの心は揺らいだ。

「カツオ君……気をつける！信じるなよそいつの言葉を！」

突然背後から声がした。その人物はマッチに火をつけタバコを曇らせた。

「『誰だ？』って聞いたそうな表情してんで自己紹介させてもらうがよ、おれぁおせっかい焼きの伊佐坂ジンロク！旅から戻ってきたところ磯野家が騒がしいから声をかけたんだが返事がねえもんで失礼ながらあがらせてもらったぜ！」

「ジンロクさん！帰っていたんですか！」

カツオが驚きの声を上げる。

一年前、ジンロクは突然伊佐坂家から姿を消した。理由は定かではないが大学十二浪を苦にしての事だろうと風のうわさで聞いた。その後まったく連絡のなかったジンロクが目の前にいる事はなんとも奇妙な光景だった。

「カツオ君、積もる話はあとだ。そして一つ教えてやるぜ！俺はこの一年間暗黒街で生きるんな悪党を見てきた、だから悪い人間と悪い人間の区別は『におい』でわかる！」

そういつてジンロクはタバコをはき捨てる。

「こいつはくせえッ！ゲロ以下のおいがプンプンするぜッ！ーッ！こんな悪には出会ったことがねえほどなァーッ！環境で悪人になったと？ちがうねッ！こいつは生まれつきの悪だッ！カツオ君！早えとこ警察に渡しちまいな！こっちは証人だっているんだぜ！」

証人！その言葉にカツオも中島も心臓を貫かれる。

「こいつの顔に見覚えがあるだろッ！」

ジンロクがつれてきた中華系の老人、カツオの記憶にはもちろんない。だが中島は――。

「この中国人がお前に毒薬を売った証言はとつてあるんだぜッ！」その言葉を合図とするように警官隊が現れる。先頭に立つのはこけた頬、白い顔、相変わらぬ咳を伴いながらも威厳に満ちた波平だ

った。

齒が潰れるほどの齒軋りの音が鳴り響く。中島はもはや動揺を隠そうとしなかった。

「ヒロシ。話はすべて聞いたよ。残念で………ならない……君のおじいさんは命の恩人……そして君には息子と同じくらいの愛情と期待をこめたつもりだったが……」

波平の中島に向ける目は父の目だった。いつもと変わらない父の目……。

「寝室に行って休むよ……息子が捕まるのを見たくはない……」
目を伏せ、波平は静かに背を向けた。その背中はやけに小さく思えた。

「すでにここまで取り囲まれていたとはな……もうおしまいかな……」
中島がポツリとつぶやく。

「カツオ……逮捕されるよ………だがせめて君の手で手錠をかけてほしい……十一年間のつきあい………わがままを言わせてもらえば肩をケガしているんだ……きつくしめないでくれ……」

中島は両手を差し出す。

「カツオ君……気をつけなせえ……」

二人の間に言葉は要らないのかもしれない。カツオと中島の目が物語っていた。

「わかった………ぼくが手錠をかけよう！」

肌がチリチリする。静電気が流れているようだ。地雷原を歩くように、一步一步中島に近づいていく。

「カツオ……人間ってのは限界があるなあ」

カツオはもう中島の目の前だ。

「引力……そう引力だ。俺とおまえが出会ったのは引力。そして引力は精神の発展………そしていま………わかった気がするよ。カツオ。お前のおかげでな……」

「なんのことだ？何を言っているッ！」

「そう俺に必要なものは……」

カツオが手錠をかける――

瞬間

「『乗り越える』ことだぁー！ツッ！」

中島の手には『矢』のようなものが乗っていた。カツオは瞬時に身を固め、来るべき攻撃に備えた、が、それはカツオの予想とはまったく違った光景だった。

「この『矢』の使い方はこうだ…俺は人間を超えるぞ！カツオーッ！」

その『矢』をふりかざす！

「ナイフを持っている！奴を射殺しろッ！」

中島の手にも光るものを見つけ、警官達がイサカM37の銃口を中島に向ける。

銃声。『フェザーライト』の名に似合わぬ爆発音が地を揺らす。

だがそれと同時に

中島は

『自分の胸』を貫いていた！

「な…なぜ…」

中島の行動にわけもわからず、銃声と怒号のなかカツオはただ立っていた。

暴力の嵐の中で、中島は笑っていた。

その6 父の遺産（前書き）

中島って原作で一回もカツオって呼んだことないんですね。磯野家に電話しても「磯野いますか」で推して参るらしい。初めて知った24の夜

その6 父の遺産

窓のガラスが豪快に割れ、中島の体が外に飛び出す。近距離からショットガンをまともに受けた中島の体は豆のような穴を無数に空け、滑稽なほど外へぶっ飛ばされた。地面に横たわる姿はマリオネツトそっくりだった。

「カツオ君！大丈夫か！野郎に何もされてないかい！？」

ジンロクがあわてて駆け寄ってくる。

「……いや、僕は大丈夫です、それより中島が気になる。こんな事いうのもなんだが『嫌な予感』がしてならない！」

「嫌な予感？あれだけ銃弾を食らったんだ、生きてるわけがないぜ！」

確かにそうだ。目の前で人が吹っ飛ぶほど銃弾を浴びて生きている人間がいるわけがない。だが撃たれる前の中島のあの不可解な行動『矢』？そう、『矢』のようなものであきらかに自分を刺したのだ。わからない……。カツオは胸騒ぎがしてならなかった。

「カツオ……」

波平がそこにいた。寝室に戻る前に銃声を聞いて戻ってきたのだろう。威厳を保った面持ちは変わらないが、その顔は悲しみに染まっていた。中島に何が起こったのか理解しているのだろう。

「父さん……」

「ヒロシは………苦しんだか………？」

「いえ……即死だと思います……」

「そうか………せめて……遺体は私たちが葬ってやろう……。彼は私たちの家族なのだから………」

波平はゆっくり窓辺へ近づく。それはミケランジェロの絵画のように神聖な光景のようだった。だれもが波平の背中を見続けていた。

「……カツオ。ヒロシはどこだ？」

ガラスのない窓へたどり着いた波平がこちらを振り向き、妙な事をつぶやく。不穏な気配を察してジンロクが窓へ駆け寄る。

「……………！！」

ジンロクの顔から血の気が引いた。

……………死体が…死体が、中島の！

「死体がないッ！」

ジンロクの声はほとんど叫び声に近い。

胸騒ぎという曖昧なものが現実になるような得体の知れない恐怖。それはいままで味わった事のない恐怖だった。

「父さんッ！窓から離れるオー……ッ！」

危機は去っていない。そう判断したカツオの叫び。だがそれと同時に

波平の胸は血で染まった。

ゴボツと厭な音をたて、波平は血を吐き出す。血に染まった胸からは手が伸びていた。

さつきまで誰もいなかったはずなのに

今は当たり前のように立っている

波平の背後の人物は

ぎこちない、ロボットのような動きで

波平の体ごと腕を持ち上げ

振り抜いた

波平の体は一直線にカツオの元へ飛んだ。あまりに軽いその体を受け止めたカツオは、その人物を見た。

一度死んだはずの、中島の姿を。

「な……中島……………」

他の人間も口を「あ」の形に固まらせたまま棒立ちしている。

「カツオ…」

そのとき腕の中から声が聞こえた。

「父さん！」

波平はまだかろうじて意識を保っていた。

「父さん…！しっかり！医者があれば助かりますッ！」

そんなことは気休めに過ぎないことはカツオにもわかっていている。素人目に見ても胸に空いた穴は確実に波平の命を奪っていくだろう。

「カツオ…ヒロシを恨まないでやってくれ…私が悪かったのだ

………実の息子ゆえにお前を厳しく教育したけれどヒロシの気持ちからするとかえって不平等に感じたのかもしれない……それが彼をこのような事にしむけたのだろう」

波平は父として、この最期の時に『精神』を残そうとしている！それはカツオの強い意志となり！誇りとなり！未来となるための『黄金の精神』！

カツオのほかに父の手が添えられる。血の気の少ないその手は冷たかった。

「悪くないぞカツオ……息子の腕の中で死んでいくと………いう……のは……」

力が抜けて、だらりと床に手がついた。

波平を床に寝かせ、胸の前で手を組ませる。そばに落ちていた布きれを父に被せた。

「父さん…安らかに眠ってください…。そしてどうか僕に力を貸してください…」

少しばかりの追悼の言葉を口にして、カツオは中島を見た。中島はよろよろと窓の淵に足をかけている。

「な…なんだこいつは！？」

「あ、あんなに弾丸を食らったのに生きているッ！」

「人間を…あ…あんな軽々と…い…い…い…いたいどうやればあんな風になるんだ！？」

「わ…わからん！気をつけろ！きつとなにか武器を持ってるに違いない！」

正気を取りもどした（といっても自体の異常さに正常な思考ができていない）警官が震える指で銃を構える。

いまや家内にはいった中島はよろよろと、しかし先ほどより確かな足取りでカツオの元へ歩いてくる。まるで新しい体に慣れてきたように！

「こ…こっちに向かってくるぞ…」

「なにしてるッ！もたつくんじゃねえ早く狙撃しろッ！きつと急所を外したにちがいねえ！」

ジンロクが叫ぶ。

「中島！とまれッ！」

近くの呆けている警官の腰から拳銃を抜き取り中島に照準をあわせる。しかしカツオも他に漏れず指が震えていた。中島はかまわず歩いてくる。

「中島！！」

「襲ってくるぞッ！」

中島はもはや先ほどの頼りない足取りではない。いつものように。まるで久しぶりに会った旧友を訪ねるように、近づいてくる。

「中島！」

突きつけられている拳銃など目に入らぬように、中島はただカツオに歩み寄る。

「中島ア—ッ！」

スタスタと

「危険だ！カツオ—！早く撃て—！早く撃つんだ—ッ—！」
カツオの前に

「…！！！」

たどり着いた。

その7 不死の怪物（前書き）

中島中島書いてたら中島愛に見えてきたよ。吉良ッ！

その7 不死の怪物

火薬の匂いが鼻につく。

中島の頭から血が吹き出ていた。

カツオの横から薄い煙を吐き出す銃口が顔をのぞかせている。銃を撃ったのはジンロクだった。

頭を撃たれた。それは確実だ。この距離で。息をする音まで聞こえるこの近さでそれは見間違えない。このまま床に倒れておわりだ。それが普通の人間だ！

カツオのそれはもはや祈りに近い。

永遠のような時間が流れる中、祈り続けるカツオの前で

中島はゆつくりと

ゆつくりと腕を上げ

頭の傷を確かめ

血のついた指を

舐めた

「し…死なねえ…頭を撃たれたのに……おれにはわからねえ……
今…なにが起こっているのかさっぱりわからねえ…」

ジンロクの膝が笑っていた。だがそれを笑うものはいない。生きた人間すべての背中越しに息づかいがきこえるほど、死の恐怖が迫っていることを感じるからだ。

「力……」

「…な」

中島の口から言葉が漏れた。

「カツオ」

「なんてことだ……」

遠くから叫び声が聞こえる。警官その中に自分の叫びが混ざっている事にカツオは気づいただろうか？

先ほどのぎこちない動きは無い。中島の体が跳ね上がり目の前から消えた。自由を取り戻したかのように躍動する中島の体は人間の限界をはるかに超えていた。

「カツオ！おれはこんなにツ！こんなにすばらしい力を手に入れたぞ！『矢』からツ！！お前の父親の血からツ！！」

（……混乱……頭の中が混乱している……『矢』……『父の死』……『血』……『中島』……『中島』……『矢』……『復活』……『未知の能力』……『未知の力』……中島……どうなってしまったんだツ！？）

「ぎゃあああああああ！！」

カツオの混乱を悲鳴が打ち消した。

みると警官の一人が天井からぶら下がっているように見えた。奇妙な光景だった。警官の頭に指が二本つき刺さっている。その手の主は、また奇妙な事に天井に立っていた。警官は阿呆のように口をだらしく空け、体を二、三回震わせた。もう声をあげる事もできないのだろう。

「UUURRRYYY！！」

カツオは目を疑った！中島の獣のような咆哮とともに警官の体がみるみるしぼんでいく！サボテンが枯れていく様子を早送りで見たような光景！二十代であろう屈強な警官はもはや老人のように枯れ果てていった。

（ひょっとして吸い取っているのか！？人間の精気を！血液を！中島は吸い取っているのか！中島は人間じゃあないのか？な、何者になってしまったんだ！？）

「うおおおおお！！（ジンロクが恐怖しているツ！）」

同じように恐怖に駆り立てられた警官が銃を中島に向ける。中島は

たった一瞥、ジロリとそれを見ると指にくっついていいる干からびた警官を投げた。

投げられた死体が警官の群れに飛んでくる。その速度に避けきれなかった警官の一人に死体の腕が触れる。次の瞬間、警官の顔が吹き飛んだ。それだけでは終わらない、衝撃で外れた死体の腕が別の警官に襲い掛かる。頭、腕、足。死体のパーツが死体を作る様はできの悪いピンボールのようだ。

シンロクにも足が襲い掛かる。かろうじて致命傷を避けたが、足がかすった腕があらぬ方向を向いている。

気づけばあたりはどす黒い赤一色に染まっていた。中島は天井から満足げにその様子を見ている。

カツオは震えを隠せない。動物としての本能が震えを隠そうとしなからだ。

中島とカツオの目があった。

「K U A A A …」

中島の目は人間の目ではなかった。カツオは見た事がないが、それは悪魔のものであった。

カツオは目をそらす。そうしなければならなかった。

だがカツオは見てしまった。横たわる父の姿を。カツオの『誇り』を。

一回り小さくなったような、それでいて偉大な父は死してなお雄弁に語りかけていた。

（父さん…）

本能を精神が凌駕した。

近くにあった家屋の一部を拾う。先が鋭利にとがっており槍のような形状になっていた。

槍を握るカツオの腕は幼児の胴回りほどになっていた。

「…正直ぼくは怖い。だが中島！君をこの世にいさせちゃあいけない！かたをつける！」

（おれはッ！今までの浪人人生の中でいろんなものを学び習ってきたッ！アフリカの珍しい動物だのアジアの奇怪な植物だのカリブ海の大木まで吹っ飛ばす竜巻だの！だが…）

「だがこんな化け物はどの教科書にものってねえッ！！頭を拳銃で撃つても死なねえッ！人間をグチャグチャにする、力を超えた力を持つ魔物はよオッ！」

カツオは槍を抱え中島とにらみ合っている。

「に…逃げるッ！カツオ君！き…君に勝ち目は無いッ！殺されるだけだッ！」

（くそっ！やられたのは腕だけじゃあねえ！折れたアバラが肺に突き刺さっているッ！カツオ君を助けるどころか足手まといになっちまった！）

カツオは意外にも冷静だった。中島とこうして対峙している間にも中島の弱点を探っていた。

（脳！中島は人間の形を保っている！だとすると人体の構造、器官の位置はほとんど変わっていないんじゃないか？それにあの未知の力！神経系の中枢である脳のリミッターが外れているに違いない！……とすると中島を倒す可能性は！頭を完全に破壊しつくすこと！強い意志を持ってやらねばならない！）

「強い意志を持つ！中島はすでに人間ではないのだからッ！魔物なのだからッ！これ以上中島に殺戮を許すわけにはいかない！！」
中島は愉快そうに目を細めた。

カツオと中島隙の無い視線の攻防の中、立ち上がることもままならないジンロクはズルズルと不快な音を聞いた。その方向に目をやったジンロクは最悪の光景を目にした。

「し…死体がッ！！中島の指で殺され精気を吸い取られた警官の死体が生き返ったッ！」

老人のように干からびた死体が芋虫のように這いよって来る。手足はちぎれもつない。

「ガヴオガヴオゝ血…ガヴオゝ」

驚いた事に言葉もしゃべるようだった。

「グアヴオーゝゝあったけエー血イイイ！ヴェロヴェロなめたアア
イ！血イイイッ！」

「ひ…ひでえッ！化け物は化け物を生み出すのかあッ！」

警官の手がジンロクの顔を覆う

「でえケケケー…ッ！血イイイ吸ったらいいだろオナア…！」

「うわあああッ！」

ジンロクの絶望が響き渡る。だがジンロクは気づいていなかった。

その叫びの中にカツオの声が混ざっている事に！

「おおおりゃあああ…！」

槍を警官の頭にめり込ませる。ベキベキと骨のきしむ音がする。

「ぬおおおおッ！」

カツオは一気に振りぬいた！風船の割れるような音を立てて、警官の頭は粉々に粉碎された。

「カ…カツオ君…ッ…！」

「怪物とはいえ……つらい……父さん…もっと強い気持ちを与えてください……！」

そのとき、中島の足が天井から離れる。

「！あぶなアー…い！上から襲ってくるッ！」

静止したような空間の中で、とうとうカツオと中島は交錯した。

その8 踊る赤

カツオが中島めがけ槍を突きあげ、中島の手がそれを制するように伸ばされる。

グボアッ

と、肉が裂ける音、骨が砕ける音。そしてわずかな血液がカツオの頬にかかる。槍はいとも簡単に中島の手のひらを貫通していた。

空を切り裂く槍は手のひらを突き破り、敵の頭を貫くべくひた走る。槍の穂先が中島の額を貫くその瞬間。槍は運動を停止した。

「うっツ！ー！と…止めやがったッ！手に串刺して止めやがった！ー！」貫かれた中島の手が、指が、槍に絡みつки、その力を奪っていた。中島は槍を片腕で掴み空中で逆立ちしているような体勢に見える。

その姿からも中島の人間とかけ離れた能力を垣間見える。が、その中島を支えるカツオの精神力ももはや人間のそれを超えている様にジンロクは感じた。

塚を握り、槍を持つカツオの腕は限界以上に膨れ上がりところどころ血管から血が吹き出している。

中島はその様子を実に楽しそうに見つめる。

ククーと口のはしを持ち上げ

「貧弱！貧弱ウ！」

まるでロードローラーのような圧倒的な力が槍をへし折る。

「うっ！」

カツオの肩に熱が走る。いままで中島を向いていた槍の穂先がカツオの肩に突き刺さっていた。

中島はひらりとカツオを飛び越え地に足をつける。と、同時にカツオの膝が地に着く。

中島の力はカツオをはるかに上回っていた。

「カ…カツオオオオ！もう少し……もう少しこのすばらしい力を
楽しませてもらうぞオ！……自分でも……どこまで……できるか…ま
だわからないからなア………」

語る中島の背中中は、黒い。一心邪悪を背負うように。

くるりと首をまわす。視線はカツオへ向けられる。背後にいるべき
カツオへ。槍に貫かれた肩を抱きうずくまっているであろう彼へ。
首を、まわす。

そして視線は空をさまよう。

「フン…195cmの…でかい体しているだけはあるな…槍を突き
刺したまま仲間を連れて一瞬に隠れるだけのパワーがあるとは…」
もともと隠れる場所など限られている。中島でなくても手前の部屋
に通じるドアに目が行くだろう。そこは家内に設置された納屋だっ
た。

さらに中島は鼻を鳴らす。犬のように。五感は何倍にも鋭くなつて
いた。

血の匂い。

納屋から匂う血の匂いは味覚を刺激している。

中島はスタスタと納屋の前に立つ。

「言つたろうカツオオ！人間には限界があるのだよ無駄な悪あがき
はよせよなア……部屋の中で怖がってないで出てこいよオ」

手がそつとノブへ

「いっしょに隠れている君の友人と共に仲良く俺の『生命』としよ
う…さっきの警官のようになアアア！」

ノブを握りつぶし、ドアをこじ開ける。

瞬間、目の前が暗転した。いや何かをかぶせられた、のだ。そして
気づく独特のにおい。これは…

「！？まさかッ！」

カツオの手にはマツチ。その先は火が弱弱しく灯っている。

「限界だとッ！そんなものはいくらでも乗り越えるさッ！」

放たれる光。そして赤。目の前には地獄のような赤が散りばめられ

た。

カツオは納屋にあったシーツをドアが開くと同時に中島に放ったのだった。灯油をぶちまけたシーツを。

目の前で炎が踊る。分裂と増殖を繰り返し彼らは舞台を広げていく。観客席にも下りてきそうな勢いだ。

「邪悪な心に化け物の力をもつ魔物！やつ…やったぞ！奴は焼けている！」

カツオは一心に舞台から目を離さない。ハイライトは間近に、二本の手が舞台を切り裂く。表れたのはまさに主役の、悪魔の顔をした中島だ。

「フアアアアッ」

「うっうッ！！な…中島は打撃を受けている！確かに皮膚を焼かれているッ！………し…しかし！」

中島の皮膚からぼろぼろなにか零れ落ちている。

「ああ…た…たしかに焼けているッ！だ…だがッ！焼けながらも皮膚の組織が素早く次々と再生しているんだ！脳に弾丸を撃ち込んで傷が治る理由はこれかッ！」

「この火では倒せないッ！！体を燃やしながらも攻撃してくるッ！火の手はもはや家中を焼き尽くそうかというほどに広がっていた。」

中島は近くにあった箆笥を片手で持ち上げた。

カツオはそれを見てジンロクを突き飛ばす。ジンロクは窓の近くまで吹き飛ばされた。

「なっ…なにを！カツオ君…」

「家から逃げる………！ジンロクさんあなたはもともと無関係の人間だ！」

と言い終わると同時に中島がまるでボウリングで球を投げるように箆笥を投げる。もっとも転がるなんて生易しいものでなく地面と水平を保ったまま弾丸のように投げられたのだが。

「うおおおおおッ！」

筋肉を膨張させ、カツオは吼える。そのまま弾丸に突っ込み肩で跳ね上げた。跳ね上がった箆笥は天井を突き破り穴を開けた。加えて火の手でもろくなった家屋はその衝撃に耐えられず、穴はさらに広がった。

身近なものを足場にカツオは跳躍、天井にわずか届かず勝手の指先だけがへりに絡みつく。中島にやられた傷がうずく。血が吹き出る骨がきしむ。だがカツオはお構い無しに懸垂のようにその巨体を片腕で引き上げる。

「カツオ君上へ逃げちゃあだめだッ！火が家中に広がっているんだぞッ！」

ついにもう片方の手がへりにかかりカツオは大きく躍動して二階に降り立った。

（カツオ君何を考えてんだ！いったいあんた！？）

カツオは階下の中島を見下ろし腕を大きく振る。

「あがつて来るんだ！中島！！」

中島の顔。笑顔と怒りが入り混じっているような顔だ。

「中島！君を！君のその力を！世の中に放つわけにはいかない！！」

その9 中島との青春に決着！

家中に火が回り、崩れ落ちた木材などがそこいらじゅうに乱立している様はまるで地獄のなかで針山を目の前に行っているようだった。

「カツオ君ッあんた何を考えているッ！？この俺を逃がそうと脱出不可能な階上へ行ったのかッ！？だ…だめだッ！！」

（仲間から注意をそらすため俺を誘っているのか…）

「よかるうまずこの火傷、おまえの生命を吸い取って治すことにするぞ…それからジンロクとかいうカスを殺し…皆殺しだ！館も全焼！！すべての証拠は残さんッ！！」

壁を歩いて登ってくるという表現そのままに、中島は壁に足を突き刺して、まるで散歩しているかのように登ってくる。

カツオも「ウッ！」と思うぞ唸ってしまった。

「無駄無駄ッ！！この程度の高さなら飛び降りてもなんとも無いのだよカツオオオ！逆に火と高さに追い詰められたのはきさまの方だア！」

まさにそのとうりだった。もともとカツオも中島が転落死するとは考えられなかったし火の勢いが増す中で階上に逃げるなどカツオにとって利は無いに等しい。それでもカツオはやるしかなかった。ジンロクを、家族を守るために。それにただ無策で挑発しているわけでもない。

「……とうさん！」

階下の父の遺体が炎に溺れていく。

「とうさん悼みます……この炎とともに天国へ行ってください…そしてどうかこれからやり遂げる事ができるように炎に力をお与えください」

「力…カツオ君はこの俺を助けるために上に行ったッ！それもあるッ！がだ彼が考えている事！もう一つあるッ！まさか！まさかそん

な！だめだそんなこと！」

ジンロクにも気づいたようだ。カツオの策が。

廻る廻る炎の中でカツオは屋根の上まで逃げてきた。足の裏に熱を感じる。

「URRRRRY！」

獣の咆哮と共に中島が屋根を突き破ってきた。同時に、蹴りをカツオに放つ。

「KUA！」

カツオは両腕を使い、さらに全体重をかけてそれを受け止める。が、それでも受け止めきれず、195cmの巨体は後方へ吹き飛ばされてしまう。

「エイイツ貧弱貧弱ウ！」

瞬間、カツオの脳裏には彼自身の青春が思い出されていた。

（愛猫タマの死！カオリとの初恋！中島が家にやってきた日のこと！）

「ぼくの青春は中島との青春！これからその青春に決着をつけてやるッ！さいわいにも距離が開けたッ！」

家の外からジンロクが屋根を見上げているいる。ワカメやタラちゃんも一緒だ。無事逃げ出したようだ。

「カツオ君はこう考えているッ！もつと強い火力ならとッ！あの魔物の肉体の回復力が追いつけないほどのもつと強い火力なら中島を倒せるとッ！そのために家に火が広まるまで待つて階上に登ったッ！良くて相打ちッ！！」

そう、それこそがカツオの狙い。そしてまさに今がそのチャンスだった。

カツオが構える

「やつ……」

肩を突き出し走り出す

「やめろオオオオオッ！！」

中島を巻き込み屋根から消えた。

「カツオくうーんッ！自分もろとも焼き尽くすつもりだアー
ーッ！！」

ジンロクの叫びは炎に溶けて消えた。

火勢はすでに十数メートルの高さの屋根まで達し各階の床は穴があいている。戦いは一階まで。一瞬で決着がつくだろう。

（僕の祖先たちが生活した磯野家が焼けている…父も死んだ…もうなにもない、すべて失った…この生命以外は…）

「この生命も燃やし尽くそう！引き換えに中島！君の魔物の力を封じよう！！」

中島は驚いていた。状況ではなく覚悟に。カツオの圧倒的覚悟にただ驚いた。

「き…きさまッ！こ…こんなことッ！よくも！」

（さっきの火傷がまだ完全に治りきっておらん。一階はすでに猛火にあるこのまま落ちれば！この火力ではこの不死身の肉体でもかなわないかもしれんッ！）

「だがッ！！」

と中島が太ももに力をいれ、カツオは挟み込む。骨の碎ける音と血がカツオの口からあふれ出す。

「アバラの5～6本も折れたかーッ！そしてッ！！」

中島の腕が壁にめり込む。先の中島の攻撃で腕に力が入らないカツオ。中島にしがみつけず、振り落とされてしまった。

「うおおあああッ」

「Good Bye Katsuo…！ほんの一瞬だがお前の覚悟には驚いたぞ。父親の死体とともに死ねてうれし涙流しな…マヌケ！」

（おれは人間を超えたッ！所詮人間如きにこの中島を倒せない事が証明されたぞ！「不死身」「不老不死」おれはこの世を支配できるッ！）

「うわあああああああ！」

叫びよりも速く落下しているような錯覚にとられる。だがカツオの頭の中はこの土壇場にあっても中島のことしか考えていない。

途中、カツオの目の前に何か棒状の鉄が落ちてきた。カツオはそれを掴み、壁に突き刺す。

片手で逆上がりのように上体を持ち上げ、さらにその棒を足場にしてジャンプした。

だが壁は耐えられず崩れ落ちる、カツオの跳躍も十分なものにならなかった。

「うつツ飛んだはいがまだ低すぎる！距離が遠い！」

とっさの判断か無意識が、カツオはベルトを外し、中島向かって投げる。ベルトは蛇のように中島の足に絡みついた。

「むッ！！」

眼下には一面の炎。そして、カツオ。

「な……なに……こいつッ！！」

カツオの最後の力を振り絞りベルトを引っ張る。中島は耐える。問題なく耐えられる。が耐えられないのは壁。中島の掴んでいる部分すべてが崩れ落ちた。

「うつッ！」

「戻ってきたぞ中島ア！！今度は離さんッ！中島！君の命運も今尽きたッ！」

カツオは中島にしがみつく。

「URYYYY！！あくまで離れないつもりだろうがな……これならどうだッ！！」

中島の手刀がカツオの肩に降りかかる。

「ぬうつッ」

苦痛に顔が歪むが、力は一向に衰えない。

「こいつ……！！両腕をへし折ったのに！骨をメチャメチャに砕いたのに！力をほんの少しも緩めんッ！」

さすがの中島も覚悟を決めた。

「よオオオし！いいだろう！ともに猛火の中に飛び込んでやろう！
！だがな！死ぬのはお前一人だ！この肉体の不死身！試してみよう
！いくら火力が強くても脱出できるぐらいの能力はあるはずさ！！」

「とうさアアアアアん最後の力をオオオオツ！！」

無心の叫び。その叫びが父の魂に通じたのか、それとも無意識のうち
ちにそうしたのか。

蹴った！壁をツ！！

蹴ったその先には…

「な…なにい！！」

中島も気づく。が、気づいたときはそれは腹部を貫通していた。
崩れ落ちたもの、乱立した、針の山。

「ギヤヤアアア！！」

カツオは投げ出されどこかに飛んでいった。

落下の衝撃で深く、串刺しとなりもはや自力で抜くには間に合わない。
い。

「ぬ…抜いているひまがツ！炎がア！炎がア俺の体を焼くウ！！」

中島の体に炎がまとわりつく。皮膚の焼けるにおい、音が中島を襲
う。

「よ…よくも！よくもきさまツよくもこんなアアアアアアアアア
ーッ！！わ…忘れていた！子供の頃からあった侮ってはいけないヤ
ツの爆発力を！！」

焼け落ちた皮膚の間から骨が見えている。間に合わない。

「カアツウオオオオオオ！！ふ…ふ…不死身…不…老…不…死イ…
こんなあ…こんなアはずでは…おれのオ人生…」

中島の声は崩れた落ちた家と共に押しつぶされた。

序序

時は流れ、魂は受け継がれる。

二年前、二つのものを失った。先祖代々の家と、家族だ。ある日突然、家から火が噴出し、その日家にいた二人の姉弟は家の外にとびだした。飛び出した外で見たのは崩れ落ちる家。テレビでしか見た事のないような光景が目の前で、しかも自分の家が、まさにそうなっていた。そして二人の兄を失った。

焼け跡はまるで戦後のようなありさまで、骨の一つも発見できなかった。ただその後の警察やら、マスコミやらが騒いだ事が非常に迷惑だったと記憶している。

事情を知るであろうジンロクは黙して何も言わなかった。

住む家を失った苦しみ、なにより家族を失った痛みは一人の少年の心に深い傷を残す。

(タラちゃん…ママにボールを投げて…フフおじょうずおじょうず)

(エヘヘですう)

(タラちゃん明日の運動会頑張つてね)

(ハイですう)

(タラちゃん何か食べる?)

(家に帰って母さんの料理のほうがいいですう)

(タラちゃん…)

(…タラちゃん…)

(……ねえタラちゃん…)

「やかましい! うつとおしいぞこのアママ!」

あの日の少年は高校生になっていた。

これは遙か彼方から続く捻れた二重螺旋の物語。

戦慄の侵入者（前書き）

いやいや、久しぶりの更新です。いやいや。

戦慄の侵入者

青い空。

日の光がまぶしいので帽子を目深にかぶる。

青い空。

天気の良い日は嫌いになった。

なぜかは自分でも良くわからない。

気がついたら嫌いになっていた。

青い空。

ふと兄と遊んでいた子供の頃を思い出しそうになる。

そうか

だからこの空は嫌いなのだ。

肺にたまった苦味を思い出の記憶と共に吐き出した。

空に上る白い煙はゆらゆらと漂い、やがて空の一部となった。

「タラオ！」

聞きなじんだ声が不良高校生に投げつけられた。

「こらタラオ！またタバコなんか吸って！」

「……」

名前を呼ばれた少年、磯野タラオは沈黙を貫く。

声の主は見るまでもなくわかった。

子供の頃からの幼馴染、野沢リカだ。年はタラオの二歳上であり今年三年生だ。

「……消えな。新学期早々およびやあないぜ……。」

「新学期早々、始業式をサボったあんたに言われたくないわね」

ひるむ様子も無くずかずかとタラオのそばによると、リカはタバコをひったくった。

「……………」

「タバコは体に悪いって言うてるでしょう？それとも何かしら。例の悪霊が勝手に持ってきたのかしら？」

「……………」

「むかしはあんなに可愛かったのにいつの間にかこんなでかくなっちゃて。また身長伸びたんじゃないの？」

「……………」

タラオはゆっくり立ち上がるとリカのそばを通り抜けて歩き出した。「ちょ…ちょっと待ちなさいよ！まだ話は…」

言い終わる前にリカは気づいた。タラオの口にはタバコが咥えられており、モクモクと煙を出している。

（どうして…？タバコは取り上げたはずなのに…それにライター…ライターもいつの間になくなっていて…）

タラオは立ち止まり、リカのほうに横顔だけ向けて

「見えたか？気づいたか？これが悪霊だ」

一言言い終わると立ち去ってしまった。

「……………」

薄暗がりの中タラオは家路についていた。

家の手前、長い階段を下るのだが、前方に人影が見える、輪郭がぼんやりとしていて良くわからないが男のようだ。

体格はたいしたことはない、武器も携帯していないようだ。

もつとも身長195cm、体重82kg、屈強な体つきのタラオにとっては相手の体格や武器の携帯は大して問題ではなかった。

また、こういった分析を瞬時に行うのは不良少年になってからついた癖のようなものだった。

近づくにつれ影が輪郭を帯びてくる。顔を目認できる距離になり、相手から声をかけてきた。

「やあ…ひさしぶりだねタラオくん」

「……………」

懐かしい記憶がよみがえる。それは昔、よく遊んだ幼馴染。波野イクラだった。

「イクラか…。てめえは隣町の坊ちゃん学校に通ってるはずだが…。
…いったい何の用だ？」

「…幼馴染に向かつていきなりですね。こちらの地に区転校する事になりましてね…。また顔を合わせることもあるだろうと思い挨拶に伺っただけですよ…」

「転校だと…？」

イクラは今年中学三年生のはずだ。そして今は三学期が始まったばかり。そんな時期に転校などめったに無い。ましてやイクラの通っていた中学校は有名な進学校。わざわざ卒業間近のこの時期に転校する理由はないように思えた。

「…まあ家庭の事情というやつでね…、僕も参っているんですよ。」

「……………」

「今日のところは失礼します。ああそうそう…」

「…なんだ」

「最近、このへんも物騒になったそうで…。君も気をつけてください。特にこんな階段ではね…。それでは失礼」

イクラは夕闇に溶けるように去っていった。

「……………」

あたりに匂いが立ち込める。鼻の奥に引つかかる、鉄を酸で溶かしたような独特のにおい。タラオは前々から嫌な予感、前兆のようなものを感じる時、それを匂いとして感知していた。あたりの些細な変化を視覚で、聴覚で、触覚で、嗅覚で、感じとり、危険を知らせるのだ。とくにタラオは嗅覚に強く訴えるようで、文字どおり鼻が利いた。

あたりに餌のような物がある気配は無い。何者かが潜んでる気配も無い。ただ鼻を突く匂いが漂っているだけだ。

「……………」

ここで立ち尽くしているだけでは埒があかない。しかたなくタラオ

は一步を踏み出す事にした。

——一步

階段を下る。

——二歩

階段を下る。

——三歩

階段を下る。

——四歩

足に

熱が走る

「なにイ!?!」

左足からバランスを崩しタラオは宙を舞う。視界の端に赤い線が走った。

(階段の下) (左足) (落ちる) (木の枝) (イクラ) (怪我) (血が出てる) (死)

断片的な思考のかけらがタラオの頭に浮かんでは消える。それはまるで走馬灯のそれだ。だがタラオは思考の欠片から、状況を打開する欠片を拾い上げる。

「うおおおおオオオ!」

それは木の枝を掴み、軌道をそらして下に生えてる木をクッションにすることだった。

届くかどうかは微妙な距離だ

タラオは腕を

限界まで伸ばす

そして木の枝を

つかみ

損ねた

あたりがスローモーションになる。死の間際での極限の集中。そしてタラオは悪霊を呼び出した。

半透明の腕がタラオの腕から出てくる。腕が幽体離脱し、出てきたというような表現が当てはまりそうなその腕は、なるほど幽霊の類を思わせた。悪霊の手は木の枝を掴み、落下の軌道を変えた。途中、木の折れる音を豪快にさせながらようやくタラオの体が木々の間でとまった。

「ムウ……」

左足のヒザに目をくれてやると、制服が裂け、血が流れていた。

（左足のヒザが切れている……。木の枝で切ったか？……い……いやちがう……落ちる前に切れていたッ……だから石段をふみはずしたのだ……確かだ……）

あたりに視線を配る

（しかし……）次なる疑問が頭をよぎる

（……いったいなぜ？）クエスチョンが消える事はなかった。

——（……ほう……なるほど、なかなか強力な『スタンド』を出す奴だ……あの方が始末しろとおっしゃるのも無理は無い。しかし……私の『スタンド』の敵ではない）——

翌日。昼休みの鐘が鳴る。

タラオは医務室に来ていた。よく授業をサボるときに利用する事が多い。あいにくほかの不良がベットを占領して漫画を読んでいた。空いているイスに座る。

養護教諭も慣れたもので特に注意するでもない。

「タラオ君。ズボンが切れてるわよ。まさかまたケンカしたんじゃないでしょうね！」

左足のヒザ。昨日、階段でできた傷だった。

「先生……ケンカしてタラオがケガしたことあるう？ンなわけないっつーの」

「そうそう。ヒヒヒ」

「ほほほほ、それもそうね。じゃあ転んだっての信じるわ……アワテンボさん」

と朗らかな笑いとその手に光るはさみが嫌にミスマッチに思えた。

「おい待ちな。何をする気だ……？」

「ズボンを切るのよ。一応診てあげるワ」

「じょうだんじゃねーぜ」

「ホホホホ、意外とセコイやつね」

おもしろくない冗談だ。

イスから立ち上がり教諭に背を向ける、と。なにかがポケットから落ちた。折り曲げられた紙切れのようだがタラオにはまったく見覚えが無い。

「さあ、君たちは体温計って仮病だってこと証明してあげるわ」

カゼですよ、早引けさせてくださいよおなど背後で軽口が飛び交っている。

その場の雰囲気になぐわれないその鼻につくものをタラオは拾い、開いてみる。

磯野タラオ

本日中にきさまを殺す

わたしの幽波紋で！
スタンド

波野イクラ

「イ……イクラッ！？」

悪意に満ちた文面が襲ってくると同時に背後の不良の声色があきらかに変わった。

「せ…先生な…なにをしているんです…!!」

振り返るとなぜか怯えている不良たち。そしてタラオに背を向けて一心不乱に腕を上下させている教諭の姿が目につつた。何かの液体が飛び散っている。

その液体は教諭の振り回しているものから飛び散り部屋中を汚している。不良の顔にも飛び散り血を連想させたが色が黒すぎる。

「なにを？って……」

「体温計を」

「ふって目もりを戻してるんじゃないのッ」

しゃべっている間も腕を振るのをやめない。部屋にますますしづきが模様を作っている。

しかしタラオにもようやくそれがなにか見えてきた。

「ひいい…た…体温計って

せ…先生！それは！万年筆です！」

それは確かに万年筆だった。いまもお一心不乱に振り続けているので、墨が飛び散っている。

「万年筆！？万年筆ですって！？これが！万年筆に見えるの？」

醜悪な形相はまったく別人のようだ。口のはしから泡が溢れてきている。

「なんて！頭の悪い子たちでしょうッ！（ガボッ）あなたたちにはこの体温計が万年筆に見えるの？（ガボガボ）」

次の瞬間、教諭はその腕をゆっくり振り上げる。まるで映画のワンシーンのようにゆっくり。しかし、タラオも不良たちも身動きが取れなかった。その手、腕の動きになぜか目が離せなかった。

「それじゃあよくッ！」

「見てッ…」

「見なさいッ！！」

振り下ろされた腕。

握られた万年筆は、不良の目に吸い込まれていった。

その挙動一つ一つができの悪いコマ送りのようだった。けしてよれない速さではなかったのによけなかった。

アクシヨンシーンで目が離せないということと一緒だったのだろう。目の前で起きていることがあまりにも現実離れしているので、タラオも不良たちも自分自身を観客にしてしまった。

一瞬、空白のカットが挿入され、痛みに気づいた脳みそが叫びをあげる。

ウギヤアアアアアア——

黒い涙が目からとめどなく溢れてる。刺された不良は顔を覆い、床に転げた。

その叫びは他の人間に役者である事を思い出させた。不良たちは叫びをあげ、パニックに陥り、あるものは廊下へ、あるものは窓から逃げ出した。その中で血が滴る万年筆を持った教諭は下卑た笑いをたてていた。

「フヒヤホ！フヒイフヒーツフヒーツ」

「こいつ！」心の中でタラオは毒づいた。

「タラオオ…あなたはまさか万年筆に見えるなんて…」瞬間、空気が張り詰める。

「いわないわよねー！ツ！」

勢いよくタラオの方を振り返ると同時に万年筆をタラオの顔に突き出した。

なんなくその手首を掴み攻撃を止める。万年筆は文字どおり目の前で止まった。筆先が悪意で震えている。

——ギリギリギリ——

「な！」

ギリギリギリ！

「うおおおおお」

考えられなかった。

タラオと教師の対格差は20cmはあるだろう。加えてタラオは屈強な青年、相手の教師はどちらかといえば華奢な女性だ。普通に考えればタラオが押し負ける要因など何一つ無い。だが！

現実にはタラオは押し負けている。顔をよじり万年筆を避けようとしたが、力が強すぎて目に刺さるのを避ける事が精一杯だった。

「なんだ！この腕力ッ女の力じゃねえ！（スタンド…イクラか！石段でおれの足を切ったのもやつの仕ワザかッ！）」

「そのとおり…」

突然背後から声がした。

振り向く事はできないが誰の声であるかはすぐにわかった。

「イクラッ！」

いつのまにそこにいたのかイクラは窓の淵に腰掛けていた。

「その教師にはわたしの『スタンド』がとりついて操っている……」

…わたしのスタンドを攻撃することはその教師をキズつけることだぞタラオ」

「て…てめエ…」

「わたしのスタンドの名は『ラプソディー』わたしは人間だがあのお方に忠誠を誓った…。だから！」イクラの殺気が放たれる。「きさまを殺す！！」

メキメキと骨のきしむ音が部屋に響き渡り、より強力に『押し』に力がこめられる。

限界だッ！タラオの腕は悲鳴を上げていた。もう幾分ももたないだろう。

そのとき。教師の口の中に、二つ光る物を見た。まるでこちらを『窺うように』。

（こいつ…これが『スタンド』かッ！？）

タラオは最後の力を振り絞る！

ウオオオオオオオオ――

顔をおもいつき横に振り、頬に刺さっていた万年筆を無理やり引き剥がす！その際、頬を一文字に切り裂いた（引き千切ったというべきか！）がなんとか顔が自由になった。

そしてすぐさま、タラオは頭突きのように顔を教師に近づける。

「――！」

それはお世辞にもロマンスの欠片もないキスだった。もちろんタラオが好きでキスしてるわけではない。

イクラに動揺が走る。まさか……

タラオが顔を勢いよく引き離す。重なるようにタラオのスタンドが現れ、教師の口からイクラのスタンドを引きづり出していた。苦しそくに悶えているのか身をくねらせながら引きづり出されているその姿は蛇を思い起こさせた。

「この先生をキズつけはしねーさ！こっやって引きづり出してみればなるほど、とりつくしか芸のなさそうなゲスなスタンドだぜイクラ！」

裁くのは誰だ！？

いまやイクラのスタンド、ラプソディーは上半身が現れるまで引き出されていた。蛇のようなものが筋繊維のように集まりラプソディー本来の姿を形作る。タラオと同様の人型をしたスタンドだった。タラオは頭と首を掴み拘束する。

「イクラ！これがテメーの『スタンド』か！緑色で筋があってまるで光ったメロンだな！」

振り返るとイクラが汗を流し、小刻みに震えている。よく見るとラプソディーを掴んでいる箇所と同じ場所に手形が浮き上がっていた。「ひきずり出したことを…後悔することになるぞ…タラオ」

「つよがるなよ、額に指のあとがくつきり浮き出てるぜ。このまま…きさまのスタンドの頭をメロンのように潰せば貴様の頭もつぶれるようだな。ちよいとシメさせてもらうぜ。吐いてもらわなきゃならんことがたくさんあるんでな…」手に力をこめる。イクラの額がへこんだ「あのお方と言ったな。だれの差し金だッ？」

「ふっ、ふふ…。簡単に言うわけにはいきませんね…」

「そうかい…。もうすこし締め付ける必要があるようだな」

ん？と、そのときタラオは気づいた。ラプソディーの腕が上がりその手から何かが溢れている。

（な…なんだやつのスタンドの手から緑色の…水…？）

「くらえ…我がスタンドラプソディーの…」

「（な…なにか！ヤバい気がする！）イクラ！妙な動きをするんじゃないあねえ…！」

緊張のボルテージが限界に達したとき、タラオの目の前が真っ白になった。

「くらえ！『エメラルドソード』…！」

至近距離でショットガンを撃たれた様な衝撃。なにがおこったのかもわからぬままタラオは壁まで吹っ飛ばされた。

「ラプソディー、エメラルドソード。わがスタンドの能力は水の操作。スタンドの体内に蓄えられた水を高速射出したのだよ。水鉄砲が強力になったものだと思うってくれればいい…。もっともエメラルドソードはダイヤですら削り取るがね。この至近距離でくれば内臓はスタボロだろうね…。そしてその教師も…」

イクラが目を向けると同時に教師が血を吐いて倒れた。

「な…なにィ…」

「いったはずだ。わたしのラプソディーに攻撃を仕掛けることはその教師を傷つけることだと…。わたしのスタンドはきさまのより遠くまで行けるが広いところはきらいでね、かならず何かの中に潜みたがるんだ…」

「……………」

「引きずり出すと怒ってしまう…。だからのだ内部あたりを出るときキズつけてやったのだ。これはタラオ…おまえのせいだ、おまえがやったのだ。最初から大人しく殺されていればこの教師は無傷ですんだものを…」

タラオの頭の奥で何かがはじけた。

キズだらけの体で、口から血をたらしながら、タラオは立ち上がる。下を向き、帽子の縁で隠されている顔はうかがい知れない。

「立ち上がる気か…だが悲しいかなその行動をたとえるならボクサ一の前のサンドバッグ…ただ打たれるだけにのみ立ち上がったのだ」
「……………」この磯野タラオは…いわゆる不良のレッテルを貼られている…喧嘩の相手が必要以上にブチのめし今だ病院からでてこれねえヤツもいる…イバルだけで能無しなんで気合を入れてやった教師はもう2度と学校へ来ねえ。料金以下のマズイ飯を食わせるレストランには代金を払わねーなんてのはしよっちゅうよ。だが！」

「だがこんな俺にも吐き気のする『悪』はわかる…！」

「『悪』とはためー自身のためだけに弱者を利用しふみつけるやつ

のことだ!!」

今のタラオをサンドバッグと呼べるだろうか。活力に満ち、まるで正義が原動力であるかのように若い光を放つこの男を。

「ましてや女をーっ！貴様がやったのはそれだ！あ~~~~ん？おめーの『スタンド』は被害者自身にも法律にも見えねえしわからねえ……だから……」

顔を上げたタラオの帽子のふちから覗くその目は黄金の光を放っていた。

「おれが裁く！」

イクラ自身気づくか気づかないかほど微小な、いくらかの動揺。おくびにも表情に出さず涼しい表情で立っていた。

「それはちがうな『悪』？『悪』とは敗者のこと……『正義』とは勝者のこと……生き残ったものことだ過程は問題じゃあない。敗けたやつが『悪』なのだ」

ラプソディーが現れ手を構える。

「とどめだ！エメラルドソード！」

緑色の雨が横殴りに襲い掛かる。幻想的な光景だがこの一粒一粒が大口径弾であり、重機関銃の掃射のようなものだった。が、タラオの口の端は上がっていた。

「なに……敗者が『悪』……。それじゃあー。やっぱりイ。てめーのことじゃあねーかアー……ッ!!」

タラオのスタンドが発動しラッシュを繰り出す。文字通り目にもとまらない速さで雨の一粒ずつ払い、モーゼの十戒のように『割って』いった。

「なにイ~~~~バカなエメラルドソードを弾き飛ばしたッ！」

勢いのままにタラオのスタンドは突き進む。壁の無い無防備なラプソディーの首を掴むとさきほどより強力に捻りあげる。

骨のきしみと、血。

頭の固定されたマスクメロンにタラオのスタンドが片手を弾丸にし、重機関銃をぶっぱなす！

「オララオラ裁くのはおれの『スタンド』だッー!!」

天井に吹っ飛ばされたラプソディーはコンクリートの破片と煙の中に消えていった。同時に、イクラも血を全身から噴出し倒れる。

「な……………なんてパワーのスタンドだ」

あたりに静寂が訪れる。

「さつきは不意をくらってちょいと胸を傷つけたただだ。しかしヤワな『スタンド』じゃなくてよかったが、以前より凶暴になってる気がするぜ」

タラオは教師のもとにいき体の具合を確かめる。もちろん専門的な知識があるわけではないが『経験』から命にかかわるかどうかはなんとなくわかった。

「あぶないところだったが。手当てすれば女医は助かるか…さて…」
あたりを見回す。

瓦礫の散らばる床、穴の開いた天井、カランと壁のコンクリートが剥がれ落ちる。ソマリアの真ん中でもこうはならないだろう。

廊下の奥で騒ぎがきこえる。そろそろ人が集まってきそうな雰囲気だ。

「騒ぎがおおきくなったな、今日は学校をふけるとして…」

イクラを見下ろす。微かに肩が動いているので生きているようだ。それを確認するとイクラをヒョイと持ち上げ、肩に担ぐ。

「こいつにはいろいろしゃべってもらわなくてはな…やれやれだ」
そうつぶやくと、タラオはいつものように学校に背を向け、悠然と歩き出すのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804m/>

磯野の奇妙な冒険

2011年10月15日21時55分発行